

年報

第25号
(令和2・3年度)

教化推進レポート

1. 宗外調査アンケートにみるコロナ禍の寺院活動
2. アフターコロナにおける教化活動の展望
— 仏事継承における青少幼年教化の可能性
3. 教化活動としての真福寺阿字観会の取り組みについて
— これまでと、これから

智山教化センター

I 緒言	1
II 令和2・3年度教化目標の推進	4
A. 研修・講習会の開催	4
B. 教区等の活動について	12
C. 各種講習会等の出講について	13
D. 出版物と教化推進、教材	14
III 教化推進レポート	17
■1 宗外調査アンケートにみるコロナ禍の寺院活動	17
■2 アフターコロナにおける教化活動の展望	
一 仏事継承における青少幼年教化の可能性	28
■3 教化活動としての真福寺阿字観会の取り組みについて	
一 これまでと、これから	34
IV その他	38
・ 購入図書 宗内寺院・教会刊行物 寄贈図書・資料	38
・ 智山教化センターの役割と活動／智山教化センター構成員	裏表紙

I 緒言

智山教化センター センター長 鈴木芳謙

はじめに

山川弘巳前智山教化センター長（現教育学部長）の後任として、令和2年度より現職を拝命し、早くも2年が経過しました。着任前にあたる令和2年の年明けころからでしょうか、にわかに新型コロナウイルス感染症のニュースが報道され始め、他国での出来事のように思っていました。しかし、その後、未知なるウイルスはたちまちに国内で拡がり、猛威を振るい、私たちの想像を遥かに超える大きな影響を人身や経済活動に及ぼしました。また、その影響は、これまで一般的とされていた社会行動や生活様式をも大きく変容させています。

毎年度発行していましたが智山教化センターの『年報』ですが、このような社会情勢、その社会情勢に起因する諸般の事情に鑑み、令和2年度・3年度の合本号として発行することとなりました。今号では、現在進行形ともいえるコロナ禍の中、各寺院・教会への教化活動に益するような情報の発信を心がけ、コロナ禍において取り組まれた教化活動・アフターコロナを見据えた教化活動について考えるレポートを各所員が執筆しています。事業等の活動報告と合わせてご一読いただければ幸いです。

社会変動と寺院 - コロナ禍を経験して

コロナ禍が予想以上に長期化していると感じている方も多いのではないかと思います。当初は中国・武漢での局所的な出来事かと思われていたことが、徐々に雲行きが怪しくなり、タレントの志村けんさんが新型コロナウイルス感染症によって亡くなり、その後、緊急事態宣言が7都府県（埼玉県・千葉県・東京都・神奈川県・大阪府・兵庫県及び福岡県）に発出された頃には、ただ事ではないという空気感に包まれました。新型コロナウイルス感染症により、亡くなった方も少なくありません。感染症によって亡くなった場合、葬儀も茶毘に付すまでは執行できず、家族が茶毘にすら立ち会えない状況が未だに続いています。あわせて「一日葬」なる通夜を行わない葬儀の形態も地域によって増えたといわれます。

このようにコロナ禍の影響は、葬送儀礼にも及んでいることが本誌レポートや各研究機関の調査からも報告されています。葬儀の変容は、これまでも本宗の総合調査などから窺い知ることはできましたが、構造的にここまで大きく変容したことは近年なかったと思います。葬送儀礼に関わるこの現象が、一過性のものなのか、常態化するのかは、今後のいわゆるアフターコロナの動向を注視する必要があるでしょう。

またコロナ禍の日本社会においては全体的に非接触・個別対応がほぼ日常化され、緊急事態宣言下では学校の休校やオンライン授業が実施され、一部の企業ではオンラインによる仕事が増え、本社を東京から地方へ移転する企業などもあり、これまでの働き方や在り方も見直されています。このような状況から波及した行事の中止やコミュニケーション不足などが心身を始めとする歪みを生じさせ、それらを遠因として亡くなる人が増えていることも指摘されています。

しかし、コロナ禍がもたらしたのは人の肉体的な死ばかりではありません。人の「死」には、①「肉体的な死」②「社会的な死」③「文化的な死」④「心理的な死」と4つの側面があるといわれます。「肉体的な死」は、文字どおり身体的な現実の死のことで、「社会的な死」は、社会との接点が失われ、他の人とのコミュニケーションが途絶えた状態のことを指します。また「文化的な死」とは、生活の中に文化的な潤いがなくなることであり、「心理的な死」とは、生きがいや生きる張り合いをなくした状態のことをいいます。たとえば、身体的には問題がなくても、生きる意欲や喜びをなくしてしまっている状態などが挙げられます。コロナ禍という事象は、これらの死の4側面のすべてに及んでいるともいえるのではないのでしょうか。

私たちは、いつの世も社会の影響を受け日々を過ごしていますが、当然寺院も例外ではありません。寺院を取り巻く大きな社会変動は、歴史上いくつもありました。「歴史に学ぶ」という言葉にしたがって、現在から150年ほど前の明治維新という大変革に照らしみるならば、国家

主導の神仏判然令や上知令の発令後、それまでの有力大寺院が廃寺になったり、現在ならば国宝級の仏教文化財が廃棄されたりと、地域によっては徹底的に仏教が排斥されました。いわゆる廃仏毀釈です。それが引き起こされた要因について、江戸時代をとおして蓄積されてきた寺院と僧侶に対する民衆の不満や反感が、集団心理として強く作用したという見解があります。このように、社会変動が起きた時、それまで鬱積した感情や思いが大きな潮流を作り出すことは、現代においてもそう異なることはないと思像できます。

コロナ禍を社会変動の一つとして捉えるならば、長い間に醸成されてきた檀家制度に代表されるような制度宗教に対しても、檀信徒がこれまでに抱いていた心情や感情の噴出の契機となり、私たち教師・寺院への視線も、いちだんと厳しくなるのではないのでしょうか。これまで以上に自覚や信念、対応力など、教師自身の在り方が試される時代になってくるのかもしれない。

体験の重要性 - 体験的教化活動の理念

現代マーケティングの父といわれる経済学者フィリップ・コトラー氏は、その著書『マーケティング・マネジメント』（1968年）の出版以来、常に社会の変容に対応しながら、マーケティングの概念をアップデートし提唱し続けています。

氏はマーケティングの目的は、「物が買える→自分にあった物が買える→買った物による体験に満足し、その満足を共有する→他者に体験を提供する」と変化し、またその志向は、「製品中心→顧客の機能

的満足→顧客の価値や精神的な満足→顧客の自己実現」へと変化したことに言及しています。

ここから窺える現在の消費者の意識は、近年のマインドフルネスへの関心の高まりなどとも共通して、内観としての「気づき」や、「唯一無二の体験」のような、他では得難いかたちのものが求められているといえます。このような視点は、教化活動でも十分に考慮される必要があるはずです。

本宗では4年度毎に教化目標（わたしたちの目標）が策定されています。「平成29年度から令和2年度まで」、「令和3年度から令和6年度まで」が1つの区切りとなっており、平成29年度からの教化目標（わたしたちの目標）「生きる力-仏さまに祈り、仏さまと出会う」を、令和3年度からも継続していくことになりました。

令和2年度には、「祈願法要」を取り上げ、「加持」を意識し展開し、令和3年度には、ご宝号「南無大師遍照金剛」を軸に、「体験的教化活動」を理念に掲げ、「金剛合掌」「洒水加持とお授け」を推進しました。これは前段で触れたような体験の重要性という観点から教化活動における体験的要素を中心に、自身の気づきを促し、さらには安心の体得に導くことを目的として組み立てられています。この体験的教化活動の理念は、令和6年度まで引き続いて展開される予定です。

「言って行ぜざれば信修の如くして信修とするに足らず」（『性霊集巻十』）とあるように、言うだけではなく、自身が実践、体験することが大切です。密教的実践を体験することを機縁に、自らが仏教への信仰に目覚め、確固たる信心が涵養されると信じています。「人生100年時代」と

いわれる昨今、自身の体験や気づきは、個々人においてますます価値が高まることでしょう。

むすびに

コロナ禍が始まって2年。これまで当たり前と感じていたことや、一般的に行われていたものとは異なるさまざまな社会変化が生じました。程度の違いはあれども、誰もが苦難を経験するなかで、さまざまな想いを抱き、痛みや辛さ、不安などを共有した2年間であったように感じます。

しかしまた、この2年という月日は、幸せについても考え、また生きる意味を見つめ直し、これまでの、そして、これからの自身の在り方に対しての思惟的な時間でもあったようにも思います。

心理学では、レジリエンス (resilience) という「逆境や困難を経て健やかさを取り戻す力」という意味で使われる言葉（もともとは物質の弾性を指す専門用語）があります。生きていると誰しも泣きたくなくなるような困難に直面することは少なくありませんが、この世に生を享けたからには、自身の置かれた場所、環境で、泥中の蓮華が花開くように、そしてコロナ禍の渦中だからこそ、より強く生きる力を感ぜられるように、ともに手と手を取り合い邁進されることを切望します。また、檀信徒や縁のある人、住職・主管者、教師、寺庭婦人、寺族のご自身も、心身ともに健やかさを取り戻せるよう願っています。

智山教化センターはこれからも情報発信や研修会など宗内寺院・教会、住職・主管者、教師、寺庭婦人にでき得ることを懸命に探り、一丸となって尽くしていきたいと考えています。

II

令和2・3年度教化目標の推進

生きる力

—仏さまに祈り、仏さまと出会う

A. 研修・講習会の開催

II

令和2・3年度教化目標の推進

1

教師・寺族向けの研修会

智山総合研修会 **中止**

本宗教師・寺庭婦人のさまざまな研鑽意欲に応えるために宗務庁が主催する分科会形式の研修会。智山教化センターでは令和2年度2つの分科会（第1・第3分科会）、令和3年度1つの分科会（第3分科会）の企画・運営を担当した。

※両年度とも新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、中止。

日 時：令和2年6月3日（水）～6月4日（木）

令和3年6月2日（水）～6月3日（木）

会 場：別院真福寺

第1分科会「地域社会における寺院が目指す方向性」【令和2年度企画】 **中止**

近年、地域コミュニティの核として機能していた寺社の物理的・心理的なハブ機能が失われつつあると指摘されるが、その一方で、“御朱印集め”をする若年女性が増加している現象もある。本分科会では、地域における寺院の役割の一つともいえる文化・文化財の継承、また地域コミュニティの中で寺院が担うべき機能、人的交流を通じた地域への貢献などに通底する、いくつかの重要ポイントを講演・事例から学び、地域社会において各寺院が目指す方向性や可能性を探る企画とした。

講 師：河野まゆ子 先生（株式会社JTB総合研究所 コンサルティング事業部 地域戦略部長 主席研究員）

浦上哲也 師（なごみ庵庵主）

司 会：伊藤尚徳 智山教化センター所員

記 録：鈴木芳謙 智山教化センター所員

（肩書きは、企画当初）

第3分科会「今、祈ること」【令和2年度企画】【令和3年度第3分科会で再企画】 **中止**

私たち僧侶は檀信徒の祈りを受け止め、ご本尊さまに届ける役目を担っている。この祈るという行為を檀信徒に伝えていくためには、自身が信じ、祈り、信仰の姿を示すことが大切なのではないか。本分科会は、平成29年度より「生きる力—仏さまに祈り、仏さまと出会う」という教化目標の根本ともいえる信仰と祈りについて、日々の勤行をテーマとし、『智山勤行法則』をどのように唱え、仏さまと向き合い、祈るのか講師自身の体験を基に僧侶の立場での祈りについて考える企画とした。

講 師：廣澤隆之 師（東京多摩教区 浄福寺住職）
佐藤隆一 師（神奈川教区 圓能院住職）
司 会：島 玄隆 智山教化センター所員
記 録：金剛洋輝 智山教化センター所員

智山総合研修会 令和3年度代替分科会 **中止**（担当分科会）

日 時：令和3年10月6日（水）、10月13日（水）
会 場：別院真福寺

※智山総合研修会第3分科会「今、祈ること」を実施予定であったが、講師の都合により中止。

令和2年度寺子屋開設講座 **中止**

宗内教師・寺族（寺庭婦人を含む）を対象として、未来の檀信徒を育成し、地域にお寺を開く活動「寺子屋」を宗内寺院・教会がより多く開催できるよう、実修などをとおしてノウハウを総合的に学ぶ企画とした。

※新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、中止。参加者には、当日配布予定であった資料を送付した。

日 時：令和2年6月19日（金）
会 場：別院真福寺
内 容：講義①「寺子屋活動をはじめよう」

実 修「寺子屋体験」

講義②「安全対策、企画・広報」

講 師：高岡邦祐 智山教化センター専門員
佐藤順興 師（埼玉第二教区 閻魔寺住職／菩提樹の森幼稚園園長）
佐藤英順 師（埼玉第十一教区 長榮寺住職）
倉松隆嗣 智山教化センター所員

令和3年度寺子屋交流会

宗内教師・寺族(寺庭婦人を含む)を対象とし、寺子屋実践者同士が互いの活動に学び合い、寺子屋で活用できるプログラムを体験し、情報交換をしながら親睦を深めることを目的とし、寺子屋の開催経験がない方にも、寺子屋の実践事例を学べる機会とした。また、参加形式を来場・オンラインのハイブリッド形式で開催した。

- 日 時：令和3年6月18日(金)
会 場：別院真福寺・オンライン
内 容：コロナ禍での寺子屋開催事例報告(4ヶ寺)
ワークショップ①「仏具の音当てクイズ」
ワークショップ②「ご先祖さまを知ろう」
座談会(コロナ禍での開催のあり方等について)
講 師：小林佑介 師(長野北部教区 圓満寺中)
江連俊隆 師(埼玉第一教区 地蔵尊院住職)
高岡邦祐 智山教化センター専門員
佐藤順興 師(埼玉第二教区 閻魔寺住職/菩提樹の森幼稚園園長)
佐藤英順 師(埼玉第十一教区 長榮寺住職)
中嶋亮順 智山教化センター所員
池田裕憲 智山教化センター所員
参 加 者：8名(会場2名 オンライン6名)



— 事例報告 —



— 座談会 —

報告：『宗報』852号(令和3年9月号)掲載

教化活動実践セミナー

教化活動の具体的場面を想定し、その状況にあわせた実践研修を行って、体験的に学ぶことを目的としている。教化活動は、その意義や方法を聞いただけでは理解できないため、体験学習を主体とした新しい研修形式として実修に主眼を置き、教化活動者の育成を目指している。令和2・3年度の実践セミナーは、「阿字観」を取りあげた。他宗の講師を招聘し実修をととして、それぞれの特徴や違い、類似点を学び、教化活動のさらなる理解と充実を目指した。

○令和2年度実施

日 時：令和2年10月26日(月)・10月30日(金)
※新型コロナウイルス感染症対策のため定員を減らし、同内容を二日に分けて行う形式とした。

会 場：別院真福寺

テ マ：「阿字観のさらなる充実へむけて
～さまざまな瞑想のかたち～」

内容・講師：「講義・事例紹介」

藤井隆英 師(曹洞宗一月院中)

「坐禅実修」

藤井隆英 師

「阿字観実修」

上村正健 智山教化センター所員

参 加 者：10月26日 14名

(内、寺庭婦人1名、教師講習所教化応用科受講生6名)

10月30日 3名



— 藤井師 —



— 坐禅実修 —

○令和3年度実施

日 時：令和3年11月11日(木)

会 場：別院真福寺・オンライン併用

テ マ：「阿字観の秘める教化への可能性」

内容・講師：「講義・事例紹介」(講師オンライン)

久利康暢 師(高野山真言宗金剛三昧院住職)

実修①：「金剛三昧院での阿字観」(講師オンライン)

久利康暢 師

「阿字観伝授」

石川照貴 智山教化センター専門員

実修②：「別院真福寺での阿字観」

池田裕憲 智山教化センター所員

参 加 者：16名



— 久利師 —



— 阿字観伝授 —

報告：『宗報』857号(令和4年2月号)掲載

愛宕薬師フォーラム

教師・寺族・檀信徒・一般の方々の知的好奇心に応えるため、仏教、さらには現代社会が抱える問題や社会現象などのさまざまなテーマで講演会を令和2・3年度1回ずつ開催した。

毎回、別院真福寺を会場に各界の専門家による講演が行われ、参加者のより深い理解を促すべく、講演後には質疑応答の時間を設けている。

■第39回 令和2年11月4日(水)

テーマ：「心を豊かにする人の感覚

～生きる力とウェルビーイング～」

講師：渡邊淳司 先生 (NTTコミュニケーションズ株式会社
社科学基礎研究所 人間情報研究部 上席特別研究員)

司会：池田裕憲 智山教化センター所員

参加者：27名



— 渡邊先生 —

報告：『宗報』845号(令和3年2月号)掲載

■第40回 令和3年11月4日(木)

テーマ：『『不安を克服する生き方とは』

～承認不安と現代人の社会背景～

講師：山竹伸二 先生 (大阪経済法科大学アジア太平洋
研究センター客員研究員／大正大学非常勤講師)

司会：倉松隆嗣 智山教化センター所員

参加者：34名



— 山竹先生 —

報告：『宗報』857号(令和4年2月号)掲載

檀信徒研修会(教化部企画運営協力) **中止**

全国の檀信徒が、信仰を深め、日々安らぎに満ちた生活を送っていただくことを目的として総本山智積院に集い、さまざまな宗教体験(御詠歌、阿字観、檀信徒法要など)を実修するために開催している。

令和2年から4年までの3年間は、宗祖弘法大師ご誕生1250年の慶祝に向けて、さまざまなプログラムをとおして、お大師さまの生涯や教えについて学ぶ企画とした。

※両年度とも新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、中止。

日時：令和2年10月7日(水)～8日(木)

令和3年9月29日(水)～30日(木)

会場：総本山智積院

テーマ：「お大師さまご誕生1250年に向けて

～お大師さまのご誕生とみ教えを学び、真言宗の修行を体験する～」

4 教区教化研究会・檀信徒教化推進会議の開催推進のために

教区教化研究会・檀信徒教化推進会議 運営セミナー **中止**

各教区の教区長や教区運営委員などの研修会企画担当者を対象に、開催意義や開催・運営手法を学ぶためのセミナーとして開催している。

※新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、中止。参加者には当日配布予定であった資料を送付した。

○令和2年度 **中止**

日 時：令和3年3月15日(月)午前・午後の二部制

会 場：別院真福寺

テーマ：「withコロナ、新しい生活様式での研修会を考える」

対 象：教区長

内容・講師：「令和3年度からの本宗の教化推進について」

鈴木芳謙 智山教化センター長

講演「インターネットを活用した研修会開催方法」

吉田住心 智山教化センター専門員

※吉田専門員による講演は、動画を撮影し、資料と共に配布した。

○令和3年度 **中止**

日 時：令和4年3月14日(月)

会 場：別院真福寺

テーマ：「社会の転換期における研修会を考える」

対 象：研修会企画担当者

内容・講師：「令和3年度からの本宗の教化推進について」

鈴木芳謙 智山教化センター長

講演「社会の転換期において寺院に求められること」

河野まゆ子 先生(株式会社JTB総合研究所 コンサルティング事業部 地域戦略部長 主席研究員)

※河野先生による講演は、動画を撮影し、資料と共に配布した。

第60回中央布教師会総会

中央布教師会は、各教区の布教師会会長が集い、年1回総会を開催しているが、令和2年度は新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、開催を中止した。令和3年度は以下の内容で開催され、その企画・運営に協力した。

日 時：令和3年4月22日（木）
 会 場：別院真福寺
 テー マ：「願いに寄りそい、祈りを通じて仏さまと出会う」
 解 説：「令和3年度からの教化推進施策について」鈴木芳謙 智山教化センター長
 講 演：「コロナ禍での教化について一檀信徒にどう寄りそっていくのか」
 鈴木芳謙 智山教化センター長
 分散会・全体会：「コロナ禍における教化活動・事例について」

報告：『宗報』850号（令和3年7月号）掲載

寺庭婦人連合会総会 **中止**

寺庭婦人連合会は、各教区の寺庭婦人会長が集い、年1回総会を開催している。その企画・運営に協力しているが、令和2・3年度は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、開催を中止した。

伝法院開設講座

智山伝法院は本宗の研究機関として、教育の一端を担うべく開設講座を開催し、教師・寺庭婦人の学習の場を設けている。智山教化センターでは令和2年度2講座、令和3年度1講座を智山伝法院と共同企画した。

○令和2年度実施

※新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、それぞれ前期講座は中止とし、後期より開講した。また、緊急事態宣言の発出により、令和3年1・2月はオンラインで開催した。

■寺院活性化論～多角的な視点で考える教化～ 9月開講

御詠歌・傾聴活動等、さまざまな方法で教化活動を行えるよう学び、時代や環境へ柔軟に対応できる寺院を目指した。また、寺院活性化事例紹介や実修を行うことで具体例を知り、自坊での活動の手助けとなるような機会とした。



— 講師：小杉秀文 智山教化センター専門員 —

■阿字観会開設講座 10月開講

受講者の自坊において阿字観会を開設することを目的とし、檀信徒を指導するために必要な教理や指導方法、開催に至るまでのノウハウを学んだ。また、受講者自身で阿字観を修するための『作法集』阿字観略作法の伝授を行った。



— 阿字観会開設講座での伝授の様子 —

報告：『宗報』843号（令和2年12月号）掲載

○令和3年度実施

※新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、9月から開講した。

■寺院活性化論～寺院と人・地域との関係性発展のために～

寺院と人・地域との関係性を見直し、寺檀関係にとらわれず社会の一部として役立つ寺院を目指し、講義を中心に事例紹介や実修を交えて学べる機会とした。

報告：『宗報』855号（令和3年12月号）掲載



— 講師：高岡邦祐 智山教化センター専門員 —

真福寺阿字観会

別院真福寺で一般を対象に開催している阿字観会の開催・指導に協力した。

※新型コロナウイルス感染症の感染拡大にともない、予定されていた日程の一部を中止。再開の折、夜の部の開催を当面見送り、15時からの「昼の部」のみ、定員を減らして開催した。

令和2年

開催日	指導担当	参加人数
4月28日(火)	中止	
5月26日(火)	中止	
6月23日(火)	中止	
7月21日(火)	中止	
8月25日(火)	中止	
9月29日(火)	中嶋亮順 センター所員	10名
10月27日(火)	池田裕憲 センター所員	10名
11月24日(火)	伊藤尚徳 センター所員	10名

令和4年

開催日	指導担当	参加人数
1月25日(火)	池田裕憲 センター所員	10名
2月22日(火)	中止	
3月22日(火)	中止	

令和3年

開催日	指導担当	参加人数
1月26日(火)	中止	
2月24日(水)	中止	
3月23日(火)	池田裕憲 センター所員	9名
4月27日(火)	中止	
5月25日(火)	中止	
6月22日(火)	中嶋亮順 センター所員	5名
7月27日(火)	中止	
8月24日(火)	中止	
9月27日(月)	中止	
10月26日(火)	倉松隆嗣 センター所員	12名
11月30日(火)	上村正健 センター所員	11名

B. 教区等の活動について

令和2年度 教区教化研究会 開催一覧

教 区	日 時	参加人数	講 師	テーマ
栃木南部	8月3日	11名	倉松俊弘 師	コロナ禍における寺院行事について考える
上総第四 (オンライン併用開催)	9月29日	15名	島 玄隆 センター所員	弘法大師の生涯の教えにおける教化のポイント 祈願における教化のポイント 事例報告
福島第三	11月16日	10名	佐藤雅晴 師	今後の寺院運営について
東京東部	2月15日	15名	コーディネーター 岸田正博 師	COVID-19禍での檀信徒への対応
長野南部 (オンライン開催)	2月18日	12名	大谷宥秀 師	コロナ禍における寺院運営、教化活動の可能性を探る
埼玉第十一 (オンライン開催)	2月19日	8名	吉田住心 センター専門員	寺院のSNSの活用

計6回 6教区開催

※「講師」の肩書きは開催当時のもの

令和3年度 教区教化研究会 開催一覧

教 区	日 時	参加人数	講 師	テーマ
新潟第三	6月9日	29名	金本拓士 伝法院客員講師	焼八千枚護摩供修行と寺院復興
九州 (オンライン併用開催)	7月1日	20名	奥島正就 教化委員	コロナ禍の行事と布教教化、及び施餓鬼会と盂蘭盆会の布教
埼玉第一 (オンライン開催)	9月6日	20名	武内優宏 氏 (弁護士)	「住職・寺庭が知っておきたい法律知識」 ～墓じまい、管理料未納など、檀家さんや業者とのトラブルを避けるために覚えておきたい法律知識～
埼玉第二	10月28日	34名	児玉義隆 師	十三仏教化の実践
神奈川	11月21日	15名	佐藤隆一 神奈川教区布教師会会長	自坊における教化のあり方を考える
安房第三	11月21日	17名	上村正健 教化センター所員	智山御宝暦の見方
上総第四 (オンライン併用開催)	11月27日	22名	金剛洋輝 教化センター所員	弘法大師1250年生誕慶祝に関して
安房第四	11月27日	18名	小林靖典 伝法院常勤教授	宗祖弘法大師空海の教え
安房第二	11月27日	20名	山田慎也 氏 (国立歴史民俗博物館教授)	死生観―葬送儀礼の歴史と変化について
高知 (講師のみオンライン)	12月3日	21名	鈴木芳謙 センター長	コロナ禍での教化活動を考える
茨城第一	12月7日	21名	黒澤彰哉 師	弘法大師ご誕生1250年に向けて 弘法大師が布教を求めた東国仏教のその後 ～茨城県における真言宗の歩み～
埼玉第十一	2月7日	8名	中嶋亮順 センター所員	文書伝道の大切さ～寺報（寺だより）の実践～
東京東部	2月16日	13名	鈴木晋怜 伝法院副院長	伝統仏教教団の未来 ～今、私たちは何をすべきか～
北陸	3月5日	4名	田村宗英 伝法院常勤教授	弘法大師信仰について

計14回 14教区開催

※「講師」の肩書きは開催当時のもの ※令和4年3月現在の報告書（報告書未提出の場合は開催届）に基づき作成

令和2年度 檀信徒教化推進会議 開催一覧

教 区	日 時	参加人数	講 師	テーマ
開催教区なし				

令和3年度 檀信徒教化推進会議 開催一覧

教 区	日 時	参加人数	講 師	テーマ
福島第二	10月29日	41名	大友栄範 師	地元の葬儀・法事について

計1回 1教区開催

※「講師」の肩書きは開催当時のもの ※令和4年3月現在の報告書（報告書未提出の場合は開催届）に基づき作成

C. 各種講習会等の出講について

令和2年度 教区講習会 出講一覧

教 区	日 時	講 師	テ ー マ
智山教化センターからの出講はなし			

令和3年度 教区講習会 出講一覧

教 区	日 時	講 師	テ ー マ
東京多摩	6月24日	吉田住心 センター専門員	宗派寺院のSNS事情から考えるネット対応について
東海・美江	7月6日	鈴木芳謙 センター長	教化目標について
東京多摩	11月26日	吉田住心 センター専門員	LINEアカウントで檀信徒とつながろう 新しい檀信徒教化の可能性

令和2年度 青年会講習会 出講一覧

教 区	日 時	講 師	テ ー マ
埼玉第二 (オンライン開催)	9月28日	吉田住心 センター専門員	布教・教化を目的にしたソーシャルメディア（SNS）の活用方法
埼玉第二 (オンライン開催)	2月24日	吉田住心 センター専門員	第2回 布教・教化を目的にしたソーシャルメディア（SNS）の活用方法

令和3年度 青年会講習会 出講一覧

教 区	日 時	講 師	テ ー マ
埼玉第二 (オンライン開催)	7月6日	高橋一晃 センター専門員	臨床宗教師と傾聴活動について

令和2年度 その他研修会等 出講一覧

出講内容	日 時	講 師	テ ー マ
教学研修所一般1期	8月11日	上村正健 センター所員	教化Ⅰ（導入ガイダンス）
教学研修所一般2期	8月26日 8月27日	池田裕憲 センター所員	教化復習、教化Ⅱ
教師講習所 教化応用科	10月15日	中嶋亮順 センター所員	教化研究Ⅵ 生命倫理
教師講習所 教化応用科	10月16日	倉松隆嗣 センター所員 金剛洋輝 センター所員	教化研究Ⅴ 発心式
大正大学講義	12月4日	花木義賢 センター所員	仏教基礎ゼミナールⅢ

令和3年度 その他研修会等 出講一覧

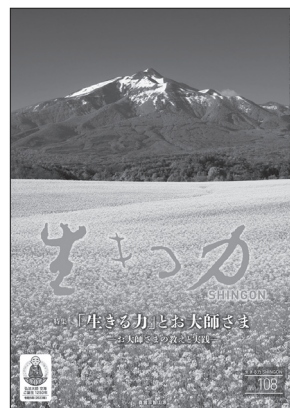
出講内容	日 時	講 師	テ ー マ
大正大学講義	6月15日	花木義賢 センター所員	仏教学基礎ゼミナールⅢ
教師講習所 基礎科	6月21日	島 玄隆 センター所員	実践布教Ⅲ 十善戒 実践布教Ⅳ お仏壇
教学研修所一般2期	8月23日 8月24日	池田裕憲 センター所員	教化復習 教化Ⅱ
教団付置研究所懇話会 第19回年次大会	10月14日	鈴木芳謙 センター長	情報化社会と宗教 —コロナウイルス感染症の影響をうけて
教師講習所 教化応用科	10月26日	鈴木芳謙 センター長	社会問題研究Ⅱ 過疎・格差社会、無縁社会、社会問題について
東京北部教区 布教師会講習会	11月9日	鈴木芳謙 センター長	檀信徒にどう寄り添って行くか？ —コロナ禍の教化について—
第54回 寺庭婦人講習会	11月29日	上村正健 センター所員	御朱印帖づくり、巡礼・遍路
心の休日体験＜阿字観＞	1月14日	鈴木芳謙 センター長 倉松隆嗣 センター所員	阿字観指導
教師講習所 基礎科	1月24日	上村正健 センター所員	実践布教Ⅴ 巡礼・遍路・団参 実践布教Ⅵ 結縁灌頂

D. 出版物と教化推進、教材

※頒布数は令和4年3月31日時点の集計値

①生きる力SHINGON 檀信徒の「生きる力」を育む仏教総合教化誌

第101号	令和2年6月1日発行 特集 願いを叶える祈り 亡き人を弔う祈り —「廻向」の心で仏さまとつながる—	頒布数104,870部
第102号	令和2年9月1日発行 特集 「平穩への祈り」と実践 —私たちが実践する仏さまへの祈りと出会い—	頒布数51,254部
第103号	令和2年12月1日発行 特集 仏さまとつながる祈り —祈りで始まる安らかな一年—	頒布数86,673部
第104号	令和3年3月1日発行 特集 祈りの実践と「生きる力」 —祈りに灌がれる仏さまの力「洒水加持」と寺院行事—	頒布数52,425部
第105号	令和3年6月1日発行 特集 生きる力とお大師さま —わたしたちの目標—	頒布数105,441部
第106号	令和3年9月1日発行 特集 「生きる力」とお大師さま —ご宝号と祈り—	頒布数51,705部
第107号	令和3年12月1日発行 特集 「生きる力」とお大師さま —祈りの姿、合掌—	頒布数84,500部
第108号	令和4年3月1日発行 特集 「生きる力」とお大師さま —お大師さまの教えと実践—	頒布数52,816部



②智山ジャーナル 智山派教師の自己研鑽と資質向上を目指す専門誌

第92号	令和2年6月1日発行 特集 祈願と教化	
第93号	令和2年11月1日発行 特集 真言宗智山派における子弟教育の歴史と現状—談林から宗派の教育制度へ—	
第94号	令和3年6月1日発行 特集 生きる力—教化の視点から捉える大師信仰—	
第95号	令和3年11月1日発行 特集 これからの寺院の営みを考える	

※各号に「人口減少社会における寺院のこれからを考える」をあわせて掲載

※92号より真言宗善通寺派さま各末寺でも購読いただくこととなった。

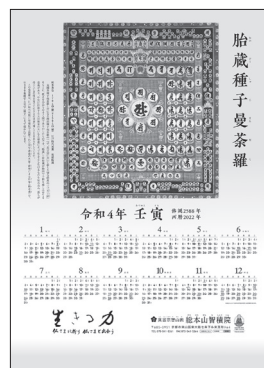


③ポスターカレンダー

令和2年9月1日発行
檀信徒頒布用B2判カレンダー
「金剛界種子曼荼羅」
1部100円
頒布数21,625部



令和3年9月1日発行
檀信徒頒布用B2判カレンダー
「胎蔵種子曼荼羅」
1部100円
頒布数20,383部



④教化目標(わたしたちの目標)啓発ポスター

令和2・3年3月発行
教化目標「生きる力—仏さまに祈り、仏さまと出会う」の
啓発とお大師さまに手を合わせてご宝号を唱え、
祈ることの意義やその大切さを伝えるポスター



— 令和3年度用 —



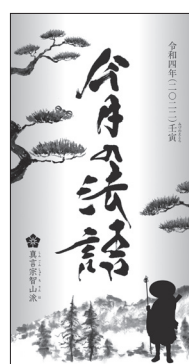
— 令和4年度用 —

⑤柱掛けカレンダー「今月の法語」

令和2年9月1日発行
檀信徒頒布用カレンダー
お大師さまの著作に学ぶ
～『聲字實相義』～
1部100円
頒布数111,166部



令和3年9月1日発行
檀信徒頒布用カレンダー
お大師さまの著作に学ぶ
～『卍字義』～
1部100円
頒布数115,310部



※頒布数は令和4年3月31日現在

⑥檀信徒研修会チラシ

令和3年6月1日発行
総本山智積院開催の
「檀信徒研修会」参加推奨のチラシ



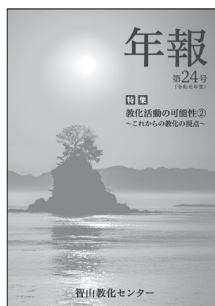
⑦寺子屋かわらばん Vol.11・Vol.12

令和2・3年3月31日発行
寺子屋活動に関する
本宗寺院・教会の交流誌



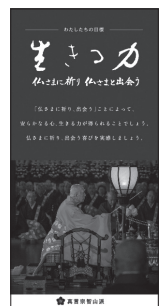
⑧年報24号

令和2年11月1日発行
智山教化センターの
1年間の活動報告



⑨檀信徒用リーフレット「わたしたちの目標」(改訂版)

令和3年3月発行
教化目標を周知するための
檀信徒向けリーフレット



⑩あまの字の子リーフレット vol.5 こころのお約束 不慳貪・不瞋恚・不邪見 十善戒③

令和3年4月1日発行
青少年に向けた
仏教情操リーフレット



⑪智山寺庭ハンドブック

令和3年11月1日発行
寺庭に求められる
知識と役割をまとめたハンドブック

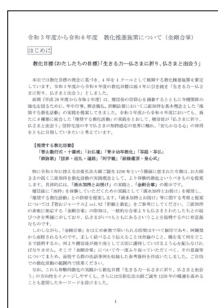


智山派寺院専用ホームページからのダウンロード版

⑫令和3年度から令和6年度までの 教化推進施策について(金剛合掌)

教化推進施策に基づき、
年中行事に「金剛合掌」を
取り入れるうえで、
教師向けに意義や檀信徒への
説明のしかたを解説した資料

※ 同内容を「宗報」848号(令和3年5月号)～
851号(令和3年8月号)に掲載



III

教化推進レポート

1 宗外調査アンケートにみるコロナ禍の寺院活動

智山教化センター 所員 池田裕憲

はじめに

令和2年4月7日、東京都をはじめ7都府県に史上初めての緊急事態宣言が発出され、同月16日にはその対象が全国に拡大された。

「人と人との接触をできる限り避ける」。ワクチンが普及していなかった当時は、この方法以外に新型コロナウイルス感染を防ぐ有効な対応策はなく、飲食・娯楽・旅行業界を筆頭に多くの産業へ大ダメージを与える結果となり、仏教界にも例外なくその影響は及んだ。本レポートでは、新型コロナウイルスが寺院活動に与えた影響と、檀信徒の意識の変化を各種調査から読み取り、今後の寺院活動に対する指針のひとつとしたい。

1. 新型コロナウイルスが寺院に与えた影響

新型コロナウイルス感染症の流行（以下コロナ禍）が寺院活動にどのような影響を与えたかについて、当事者である私たちは肌で感じ取っていることが多いであろうが、改めてアンケートデータから数値として確認したい。

はじめに大正大学地域構想研究所・BSR推進センターにより実施された「寺院における新型コロナウイルスによる影響とその対応に関する調査」の集計結果を参考に、葬送儀礼や年中行事、教化活動に与えた影響・変化をみていく。この調査は現在（令和4年

2月）のところ令和2年5月（第1回調査・有効回答数517名）、同年12月（第2回調査・有効回答数304名）、令和3年12月（第3回調査・有効回答数353名）と計3回、全国各宗派の寺院関係者（住職、寺庭、寺族など）に向けインターネットによるWEBアンケートを行い、その変化を追っている。

1-a 葬儀への影響・変化

まずは葬儀について、コロナ禍ではどんな変化があったのだろうか。

●葬儀についてどのような変化がありますか

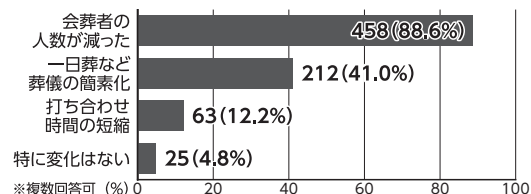


表1-1 第1回調査

●葬儀に関して新型コロナウイルス感染拡大以前と比較して現在はどうな状況ですか

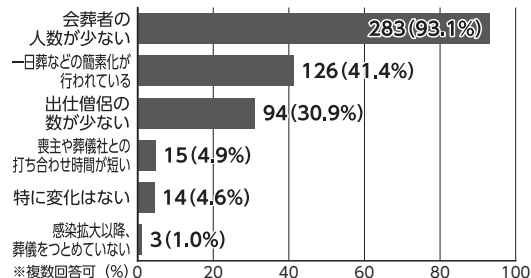


表1-2 第2回調査

●葬儀に関して新型コロナウイルス感染拡大以前と比較して現在はどうな状況ですか

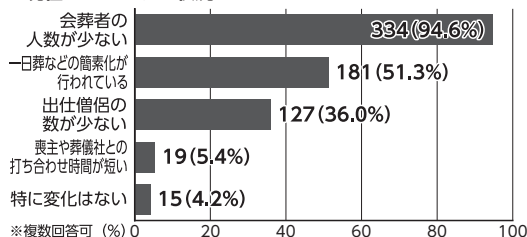


表1-3 第3回調査

●年回忌法要に関して新型コロナウイルス感染拡大以前と比較して現在はどうな状況ですか

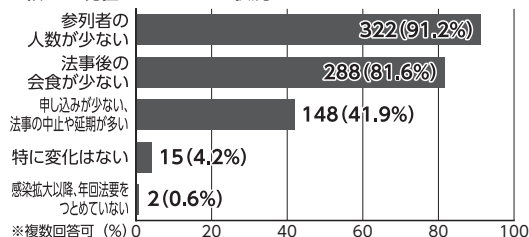


表2-3 第3回調査

いずれの結果も最上位の回答として「会葬者の人数が減った（第1回結果）／会葬者の人数が少ない（第2回・第3回結果）」が挙げられており、少しずつその割合は増加している。次いで「1日葬などの簡略化が行われている」回答が多い結果となった。こちらの回答に関しては、新型コロナ流行直後から最新調査にかけて約1割の増加がみとれる。

1-b 年回忌法要への影響・変化

続いて、年回忌法要についての変化はどうであろうか。

●法事についてどのような変化がありますか

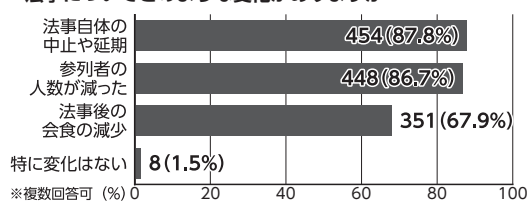


表2-1 第1回調査

●年回忌法要に関して新型コロナウイルス感染拡大以前と比較して現在はどうな状況ですか

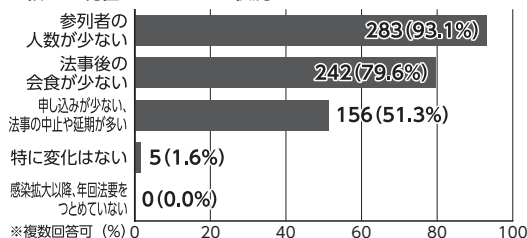


表2-2 第2回調査

葬儀へ与えた変化・影響と同様、参列者の人数減少が上位に挙がっている（第1回調査のみ中止や延期が最上位である。まだ新型コロナ流行当初であったことや、緊急事態宣言が初めて発出されたことなどが要因と考えられる）。感染拡大以降の第2回・3回調査では「申し込みが少ない、法事の中止や延期が多い」との回答が約5割あることに注意したい。

葬儀・年回忌法要ともに「参列者の人数が減った／少ない」という回答が最上位にきており、その割合は約9割と非常に高い数値である。いわゆる3密を避けるための方策として人数を減らすことは致し方ないことであるし、斎場などで人数制限がかけられている場合も考えられる。問題は「葬儀の簡略化」「法事の申し込み減少／中止」である。

「葬儀の簡略化」については地域差があるにせよ、以前から増加傾向にあり、新型コロナウイルスの出現によりその広がり加速していると感じる。「法事の申し込み減少／中止」についても単純にコロナ禍の影響のみであるといい切れるだろうか。葬送儀礼に対する檀信徒の意識変化に対して、寺院側がすべき丁寧な対応や儀式の意義説明を充分にしているかなど、改めて見直すべき点があるのではないだろうか。

1-c 年中行事法要への影響・変化

次に葬儀・年回忌法要以外の定期法要

(年中行事法要) についての変化をみる。
(※第1回調査は該当質問なし)

●新型コロナウイルス感染拡大以降、檀家・門徒・信徒を寺院に集めて行う定期法要(彼岸法要や施餓鬼法要、報恩講など)をどのように行いましたか

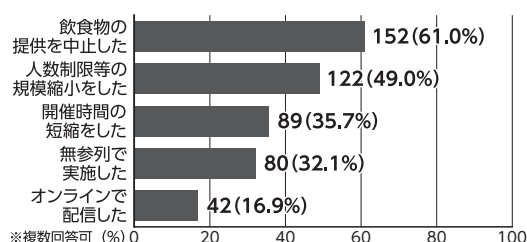
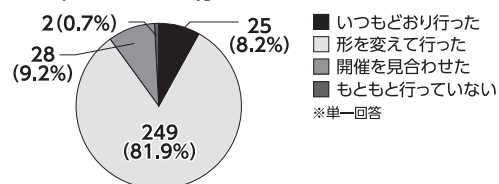


表3-1 第2回調査

●新型コロナウイルス感染拡大以降、檀家・門徒・信徒を寺院に集めて行う定期法要(彼岸法要や施餓鬼法要、報恩講など)をどのように行いましたか

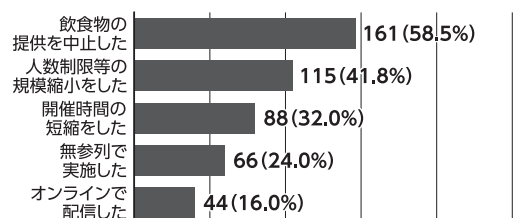
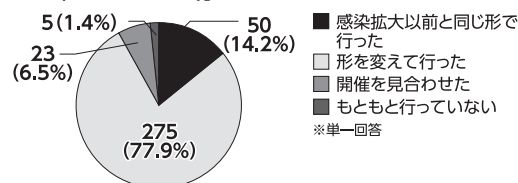


表3-2 第3回調査

第2回、3回調査ともに「形を変えて行った」という回答が約8割あり、「開催を見合わせた」は1割に満たないという結果となった。行事の開催にあたっては飲食物提供の中止や人数制限・時間短縮などの規模縮小、無参列での勤修など、接触による感染を減らすべく対策が取られている。その他自由記述での回答では、「法要回数を増やす

等で人数を分散させた」「屋外での参列/焼香、堂内への入場制限を行った」「出仕僧侶の削減」が主であった。また、オンラインで配信したという回答も1割5分ほどみられた。

1-d 教化活動(法要以外の定例行事)への影響

法要以外の定例行事、いわゆる教化活動の実施状況はどうだろうか。(※第1回調査は該当質問なし)

●現在、写経会・法話会・坐禅会・念仏講などの定例行事をどのように行っていますか

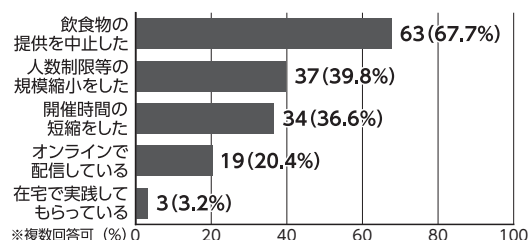
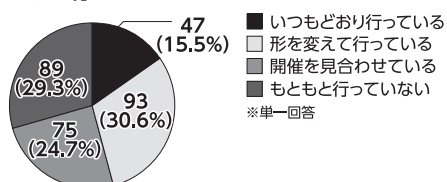


表4-1 第2回調査

●現在、写経会・法話会・坐禅会・念仏講などの定例行事をどのように行っていますか

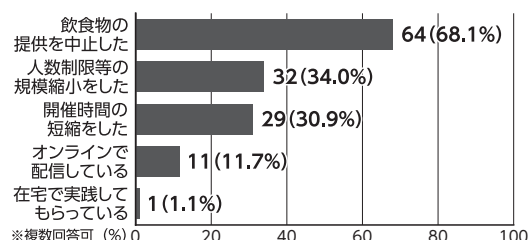
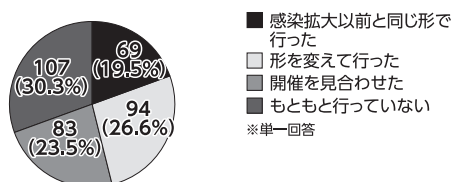


表4-2 第3回調査

教化活動の開催状況に目を移してみると、年中行事法要に対する同様の質問に比べ、「開催を見合わせている」回答の割合が多く、何らかの教化活動を行っている寺院のうち、約3分の1が中止という判断をしている。しかし緩やかにだが「感染拡大以前と同じ形で行っている」という寺院も増えてきているようだ。

年中行事と同様、回答割合が多いのは「形を変えて行っている」である。その内容も感染対策のため飲食物提供の中止や規模を縮小しているというものが主であることに変わりはない。オンラインの使用率は年中行事法要より少ない結果となった。（ここまですべて出典：大正大学地域構想研究所・BSR推進センター「寺院における新型コロナウイルスによる影響とその対応に関する調査」単純集計の結果報告より）

新型コロナウイルスが寺院に与えた影響—まとめ

ここまで、葬儀、年回忌法要、年中行事法要、教化活動における新型コロナウイルスの影響と変化について確認した。

いずれの活動も規模を縮小しての、特に人数制限や人員削減を行っての開催が多いことが調査結果からみて取れる。教化活動に関しては、やむを得ず中止することを選ぶ寺院も少なくない。新型コロナウイルス感染対策を取りつつ、最低限の寺院活動を停滞させないための方法として、規模と人数を縮小して開催することは、最適解のひとつである。しかし結果として檀信徒との対面での接触機会・時間が減少してしまう。檀信徒との信頼関係を繋ぎ続けるためにも、それを補うコミュニケーション方法の創出が課題である。

2. コロナ禍での檀信徒の意識

ここからは視点を変え、コロナ禍の最中で檀信徒が寺院やその活動をどのように感じているのかをみていきたい。ここでは、全日本仏教会と大和証券株式会社が合同で行った調査「仏教に関する実態把握調査」を参考資料とする。この調査は全国のインターネット調査会社モニターの男女（20～79歳 非寺院関係者）を対象に実施されている。

以下この調査を元に、法要の実施状況、その今後の予測、そして菩提寺との関係性についてみていきたい。

2-a お盆法要の実施状況と今後（図1参照）

まずは代表例としてお盆法要について、菩提寺のある方に絞りその実施状況と今後の予測を確認する。

コロナ禍以前、「お盆法要を毎年／節目で執り行っている」という回答は菩提寺のある方全体で50.3（21.4+28.9）%。2021年、コロナ禍では「執り行った」「時期をずらして執り行う予定」の人はその中の60.4（46.8+13.6）%である。そして、今後「コロナ禍収束にかかわらず、執り行う予定」である人は41.4%に留まり、コロナ禍が続けば今までお盆法要を毎年／節目で執り行ってきた人たちも、半数に近い割合で法要を行わないという結果となった。また、「コロナ禍収束にかかわらず、執り行う予定はない」という回答が14.0%ある。コロナ禍をきっかけとして、これまで続けてきたお盆法要を今後は行わないという結論に至った人も一割超いるようだ。

こうした数値を見ると、やはりコロナ禍では法要を執り行う希望は少ない。またその傾向は菩提寺からの距離が離れる（菩提寺が居住地と違う都道府県にある）と強ま

毎年／節目で「お盆」法要を執り行っている人の動向

■ウエイトバック (WB) について
アンケート回答者の割合が事前調査で得られた各性別×年代の出現率を同じになるようにウエイトバック係数をかけて集計されています。

	WB前 (n=)	WB後 (n=)	50.3%			
コロナ禍以前 2020/3以前						
菩提寺ある方(全体)	(3,720)	(3,513)	21.4	28.9	21.7	28.0
菩提寺が居住している場所と 同じ都道府県内にある	(2,789)	(2,671)	23.4	29.4	20.9	26.2
菩提寺が居住している場所と 違う都道府県にある	(931)	(842)	15.1	27.1	24.0	33.8

毎年、節目で執り行っている人の動向

今年 2021						
菩提寺があり毎年、節目で お盆法要を執り行っている方	(1,874)	(1,767)	46.8	13.6	39.6	
菩提寺が居住している場所と 同じ都道府県内にある	(1,470)	(1,411)	49.3	12.4	38.3	
菩提寺が居住している場所と 違う都道府県にある	(404)	(356)	36.5	18.5	45.0	

今後						
菩提寺があり毎年、節目で お盆法要を執り行っている方	(1,874)	(1,767)	41.4	28.5	14.0	16.1
菩提寺が居住している場所と 同じ都道府県内にある	(1,470)	(1,411)	43.2	26.8	14.0	16.0
菩提寺が居住している場所と 違う都道府県にある	(404)	(356)	34.5	35.2	14.2	16.2

図1 仏教に関する実態把握調査2021年

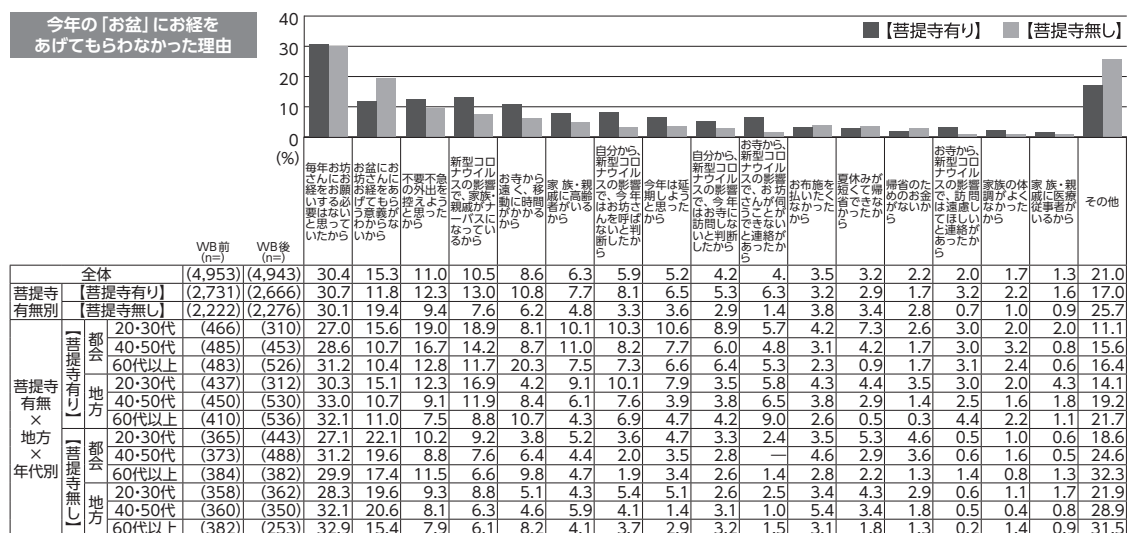


図2 仏教に関する実態把握調査2020年

ることにも示されている。そして、コロナ禍を機に、寺院との付き合い方や、法要の申し込み/参加意識などについても見直され始めていることが読み取れるのではないだろうか。(図1 出典:「仏教に関する実態把握調査(2021年度)」(公益財団法人全日

本仏教会・大和証券株式会社))

お盆の非実施理由(図2参照)

新型コロナウイルスが流行した2020年(令和2年)の「お盆」にお経をあげてもらわなかった理由としては、「毎年お坊さんに



図3 仏教に関する実態把握調査2020年

お経をお願いする必要は無いと思っていたから (30.7%)」が最上位となり、次いで「新型コロナの影響で家族・親族がナーバスになっているから (13.0%)」「不要不急の外出を控えようと思ったから (12.3%)」そして、「お盆にお坊さんにお経をあげてもらふ意義がわからない (11.8%)」と続く。

この調査結果が示すには、お盆に「毎年お坊さんにお経をあげてもらふ必要は無い」といった意識がコロナの影響より強く出ており、新型コロナの影響と同程度の割合で「意義がわからない」という回答がなされている。

日本人に一番なじみが深いであろう仏教関連行事のお盆でこのような結果が出されるということは、その他の行事/法要などを対象に調査を行っても、毎年必要性や

そもそもの意義がわからないといった回答率は同様かこれ以上となると考えられる。

行事や法要を「行う」だけでなく、意義や内容を「伝える」努力が必要である。

2-b 寺院行事中止に対しての反応 (図3参照)

コロナ禍において法要や教化活動などが縮小/中止されたことは先に報告したとおりだが、その際、檀信徒はどのように感じていたのだろうか。

最も多かった回答は「残念だが今後は開催されることを期待したい (43.1%)」であり、中止を残念に思う、悲しく思うなどの寺院に対する好意的な反応は74.0%と高い。

コロナ収束後に参加したい行事・イベントとしてあげられたのは「家系のお墓への墓

菩提寺の満足度と今後の付き合い方

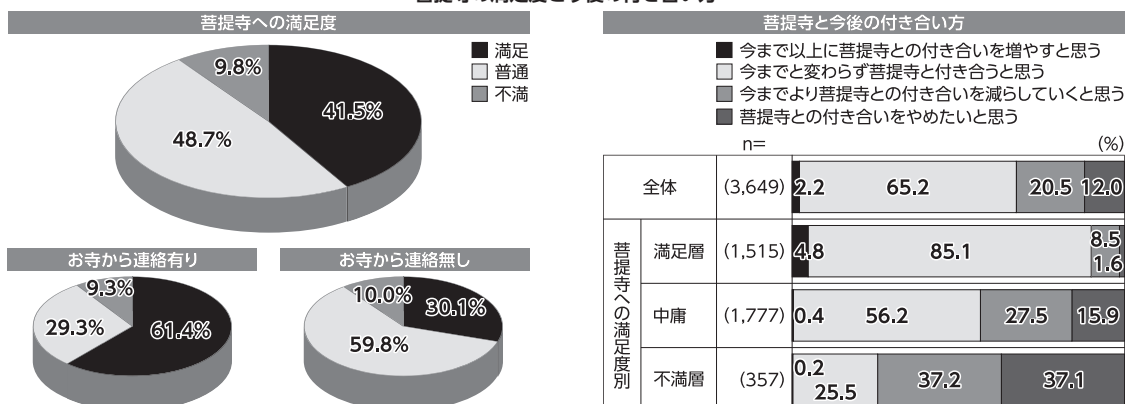


図4 仏教に関する実態把握調査2020年

コロナ禍における菩提寺との接点と満足度

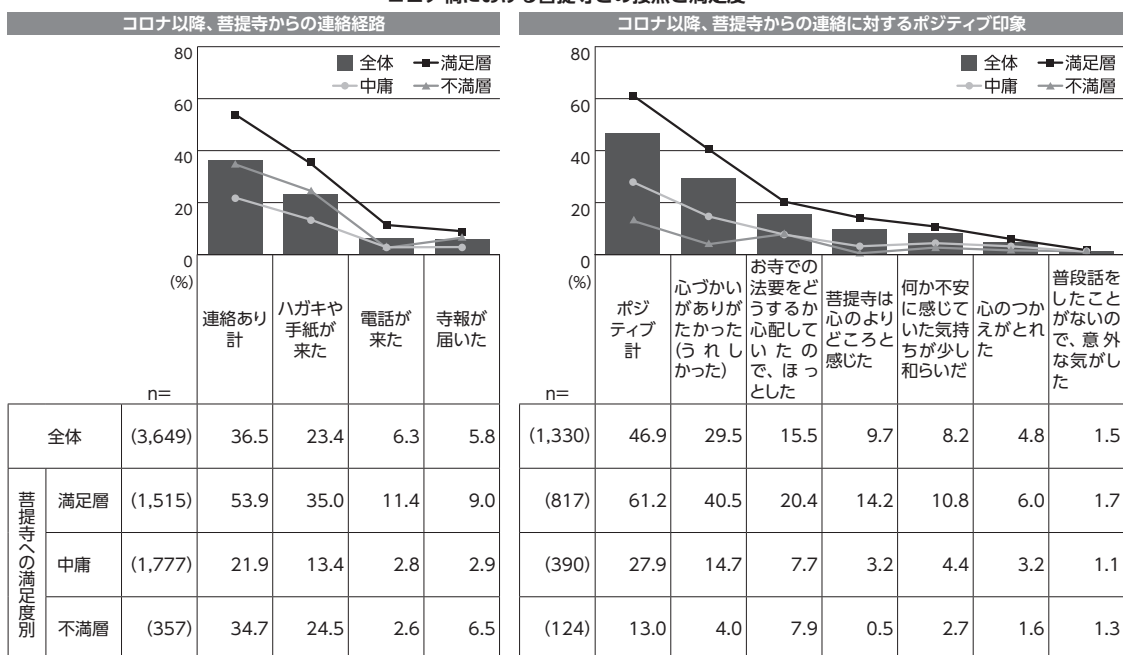


図5 仏教に関する実態把握調査2020年

参り (60.3%)」「菩提寺への参拝 (39.7%)」「初詣 (37.7%)」が上位であり、その理由としては「先祖を大事にしたいから (64.9%)」「毎回の行事だから (53.5%)」「季節の行事だから (47.5%)」と、先祖を大切に思う気持ちが強くと表れていることがわかる。また、寺院行事は強く意識しなくともその時期になれば参加する、換言すれば生活の中に溶け込んでいるという受け取り方もできそうだ。

2-c 菩提寺との関わりとその満足度

コロナ禍では檀信徒と対面でコミュニケーションをとる機会が激減したということは先にも述べたが、寺だよりや各種SNSなどでの発信力強化に努めた寺院も少なくないだろう。コロナ流行のタイミングで、寺院から何かしらの「連絡が有った場合／無かった場合」では印象はどう違ってきているのだろうか。

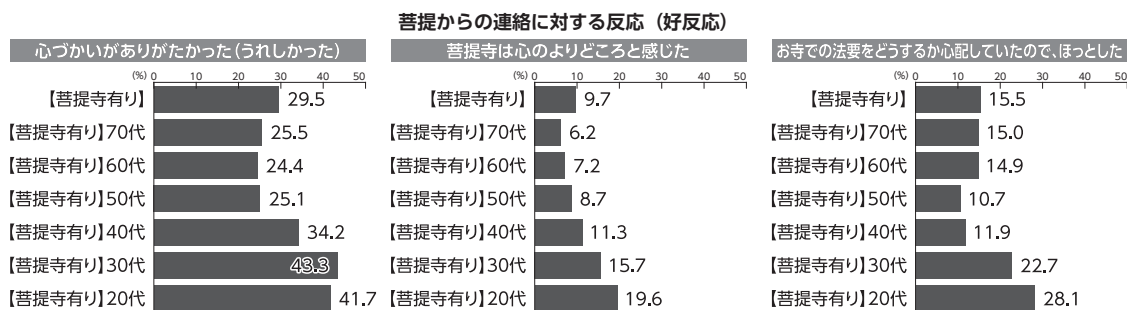


図6 仏教に関する実態把握調査2020年

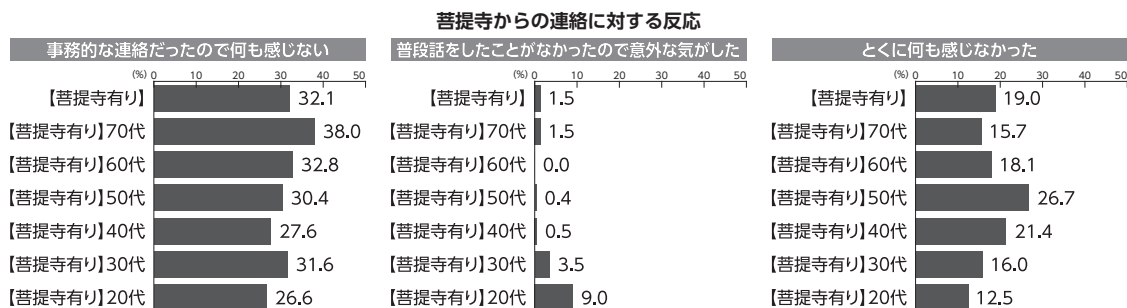


図7 仏教に関する実態把握調査2020年

菩提寺からの連絡 有／無 による満足度の違い（P23図4、5参照）

図に示されているとおり、「お寺から連絡有り」層は「お寺から連絡無し」の倍、満足度がある。しかし連絡が無いからといって「不満」という回答の比率は上がるわけではないようだ。

連絡を受けていないグループの中で、比率が一番多いのは、満足度で「普通」と答えた層である。良くも悪くも思っていない、いわゆる「無関心」ということだろうか。このように、寺院側からの働きかけがないままだと菩提寺への満足度、そして意識や関心は次第に薄まっていくであろう。菩提寺への意識・関心を持ってもらうための対策が必要である。また、菩提寺への満足度が低いほど、菩提寺との付き合いを減らしていきたいという傾向がはっきりと出ている。

菩提寺からの連絡に対する反応(図6、7参照)

菩提寺からの連絡があった方が満足度は高まるということだが、連絡の方法や内容、受け取る人間によりその印象はさまざまである。連絡を受けた人たちはどのような反応であったのだろうか。「好意的な反応、それ以外」と分類した結果がこちらである。

好反応を示しやすいのは20代や30代であり、年代が上がるにつれ、好反応の割合は低下する。一方「事務的な連絡だったので何も感じない」という回答は、全年代ともに3割前後の数があり「特に何も感じなかった」という回答も多くはないが全年代に1割～2割程度存在する。

もちろん檀信徒への定期的な連絡はあるに越したことはないが「連絡をしたからよい」ではなく、檀信徒の心に届く内容を意識しなければならないと改めて気づかされる結果である。

60

■【菩提寺有り】 ■【菩提寺無し】

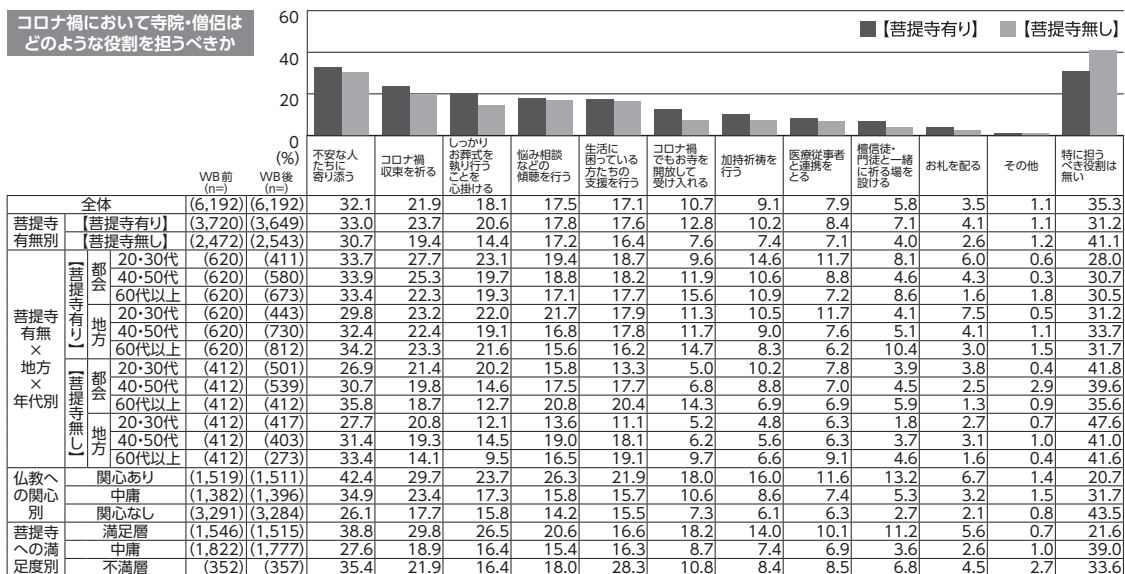


図8 仏教に関する実態把握調査2020年

2-d コロナ禍において寺院・僧侶に求められること（図8参照）

こちらの表では「不安な人たちに寄り添う (32.1%)」「コロナ禍の収束を祈る (21.9%)」が目立った回答であるように思えるが、全体でみると実際の最多意見は「特に担うべき役割は無い」である。不安な人々に寄り添い、疫病退散を祈ることは僧侶にとって当然のつとめであろう。何か特別なことをするのではなく、どんな状況であったとしても、寺院が寺院としての、僧侶が僧侶としての役割を果たすべきではないだろうか。

この結果をどう受け止めるかは自由であるが、寺院や僧侶に対して関心が薄い、活動への認知度が低い、ということを表しているとも考えられる。【図1～8 出典：「仏教に関する実態把握調査（2020年度）」（公益財団法人全日本仏教会、大和証券株式会社）】

3. 寺院のDX(デジタルトランスフォーメーション)

“デジタルトランスフォーメーション”コ

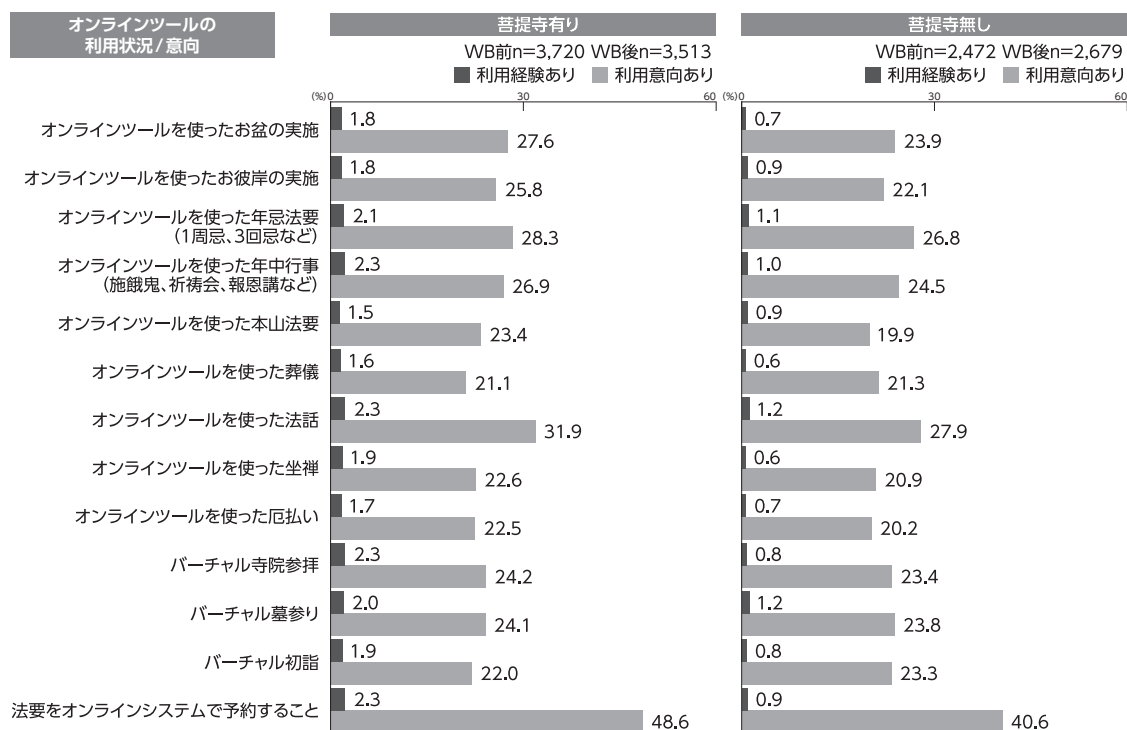
ロナ禍でよく耳にする言葉のひとつである。経済産業省では「企業がビジネス環境の激しい変化に対応し、データとデジタル技術を活用して、顧客や社会のニーズを基に、製品やサービス、ビジネスモデルを変革するとともに、業務そのものや、組織、プロセス、企業文化・風土を変革し、競争上の優位性を確立すること」と定義している。

つまるところ情報や業務、作業などのデジタル化である。「テレワーク」や「リモート会議」といった言葉も聞き慣れ、オンラインでの会合も珍しくはなくなった。

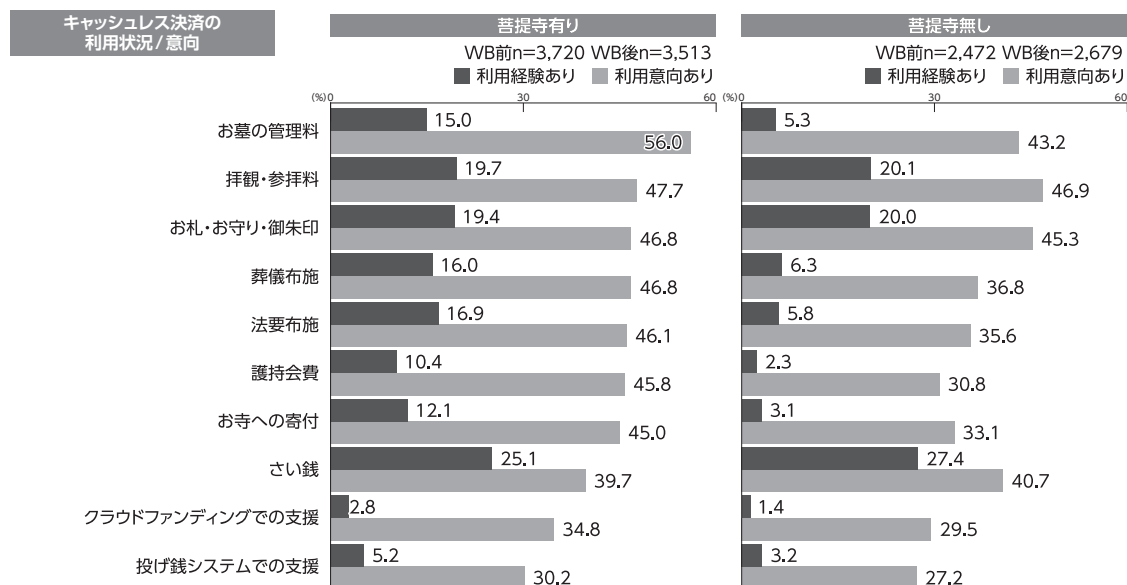
寺院とデジタル、相反するイメージに取られがちだが実際の檀信徒の意識はどうだろうか。前項目での参照資料「仏教に関する実態把握調査」報告書からその実情を探る。

3-a オンラインツールの利用状況と意向 (P26グラフ1参照)

寺院によるオンラインツール利用率は1～2%と低い、「檀信徒の意向」としては20～40%後半とある程度高い結果が出ている。なかでも「法要をオンラインシステム



グラフ1 仏教に関する実態把握調査2021年



グラフ2 仏教に関する実態把握調査2021年

で予約すること」は50%近くの数値を出している。各種法要のオンライン実施への意向も5人に1人の割合で持っている。参拝者を大勢堂内へ招き入れることが難しい今、

オンラインツールを用いた法要の申し込みや、中継などが望まれているのだろう。前向きに検討するべきだといえそうだ。

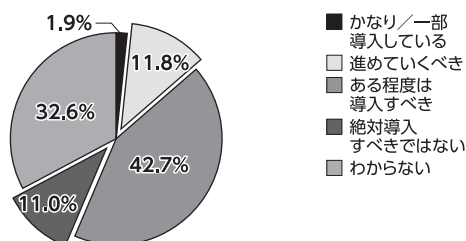
3-b キャッシュレス決済の利用状況と意向 (グラフ2参照)

続いてキャッシュレス決済についてはどうだろうか。こちらもコロナ禍でより身近になったもののひとつだ。クレジットカードの国際ブランドであるVISAの調査によると、コロナ禍で生活様式に変化があったことのトップは「キャッシュレス決済で支払うことが増えた」ことだという(注1)。寺院、檀信徒間でも金銭のやりとり(あえてこの表現を使用する)の場面は多々ある。檀信徒は寺院においてもキャッシュレス化を望んでいるのだろうか。

グラフを見ると利用意向は比較的高いといえそうだ。墓地管理料や護持会費、各種法要の布施など、約5割の人が「意向あり」という回答だ。(グラフ1、2 出典:「仏教に関する実態把握調査(2021年度)」(公益財団法人全日本仏教会・大和証券株式会社))

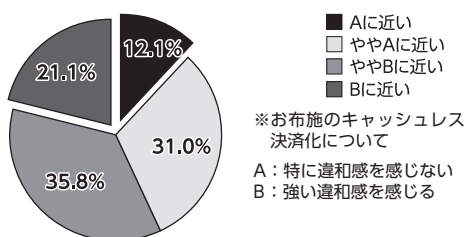
3-c キャッシュレス決済の是非

●菩提寺はキャッシュレス決済を進めて良いか？



グラフ3 仏教に関する実態把握調査2021年

●お布施をキャッシュレス決済化しても良いか？



グラフ4 仏教に関する実態把握調査2021年

菩提寺のキャッシュレス決済導入については(グラフ3参照)「ある程度は導入すべき」

(42.7%)が最も多い回答であることから、寛容的な考えが多いように見受けられる。

しかし、お布施のキャッシュレス決済化については(グラフ4参照)違和感を感じる人の方が多いようだ。(グラフ3、4 出典:「仏教に関する実態把握調査・概要(2021年度)」(公益財団法人全日本仏教会・大和証券株式会社))

おわりに

コロナ禍での寺院活動の実際として、新型コロナウイルスが寺院に与えた影響と檀信徒の意識変化、コロナ禍で進んだDXに対する意識についてデータとともにみてきた。

それぞれの寺院は、置かれる環境も違えば住職の考えや檀信徒との距離感も千差万別であることは重々承知である。しかしこのような客観的に数値化されたデータに目を向けると、これからの寺院活動の舵取りに有益な情報も得られるはずだ。時代に迎合するというわけではなく、檀信徒の意向や世の中の情勢に合わせ、選択肢のひとつとして新たなものを取り入れることも時には必要であると思う。

かつて仏教の真髄を求め唐に渡り、当時の最先端の文化を持ち帰ってこられたお大師さまのように、我々も新しいものを取り入れ、常に学ぼうとする姿勢を忘れてはならない。この記事が少しでも皆さまのお役に立ち、寺院活動の発展に寄与することができたら幸いである。

脚注

1) 「コロナ禍での支払いやお金の管理に関する調査」
2021.8 Visa × MMD研究所

○BSR推進センター

大正大学地域構想研究所・BSR推進センター「寺院における新型コロナウイルスによる影響とその対応に関する調査」結果報告書

○仏教に関する実態把握調査

「仏教に関する実態把握調査(2020年、2021年)」(公益財団法人全日本仏教会・大和証券株式会社)

2 アフターコロナにおける教化活動の展望 —仏事継承における青少年教化の可能性

智山教化センター 所員 中嶋亮順

はじめに

新型コロナウイルスの出現から2年が過ぎ、ようやくその災禍から抜け出すための光明が見え始めている。新型コロナウイルスが社会に与えた影響は大きく、コロナ禍が終息したとしても変容した社会がすぐに元に戻ることはないだろう。しかし、だからといって将来を憂うだけでこのまま傍観していてよいのだろうか。

本稿ではコロナ禍がもたらした社会の変化、特に好ましい変化に目を向け、アフターコロナにおける教化活動の展望を考察する。

新型コロナウイルス感染症の現状

元号が令和へと変わり半年が過ぎた年の瀬に、中国武漢市において重篤な肺炎を引き起こす新型コロナウイルス感染症が確認された。コロナウイルス自体はもともと自然界に存在し、いわゆる風邪の症状を引き起こすものであったが、新型の名を冠したこのウイルスは従来のコロナウイルスと異なり、高い感染性と致死性をもつ驚異的な変異種であった。およそ20年前に流行したSARS（サーズ）やMERS（マーズ）といった感染症は記憶に残っているだろうか。これら感染症も同様にコロナウイルスの変異種であったが、SARSが32の国と地域にわたり8,069人の感染者と775人の死亡を招いたのに対し、新型コロナウイルスは全世界にわたって約4億人の感染者と600万人の死者を記録し（令和4年2月現在）、いまなおその犠牲者は増え続けている。わが国にお

いても358万人の感染者と2万人の死者を数えた（令和4年2月現在）。対岸の火事であった20年前のSARS流行時に一体どれだけの者がこれだけの感染症の到来を予見できたのであろうか。

わが国において、新型コロナウイルス感染症の発症予防に効果的とされるワクチンの接種が始まったのが令和3年2月であり、1年後にはおよそ8割の国民が2回接種を終えている。しかし、このワクチンには一定の効果が認められているものの抜本的な解決には至っておらず、いまなお感染拡大と沈静化を繰り返している。令和3年末に承認された経口治療薬をはじめ、さまざまな治療が施されているが、この年報が発刊される8月ごろに、新型コロナウイルス感染症が完全に終息したか予見することは難しい。

コロナ禍による社会の変化

今後の教化活動の可能性を探る前に、新型コロナウイルスによって社会がどのように変化したか振り返ってきたい。コロナ禍となり、最も制限されたのが「人と人との接触」である。未知のウイルスであるため、最も重視された対策は感染者との接触を避け、感染自体を防ぐことであった。「密閉・密集・密接」を避けるという言葉に表されるように、人々が集うことが禁忌とされ、緊急事態宣言の発出により人流が抑制された。

一度目の緊急事態宣言の発出後（令和2年4月23～5月12日）、民間企業においては感染拡大を防ぐために在宅勤務・テレワーク

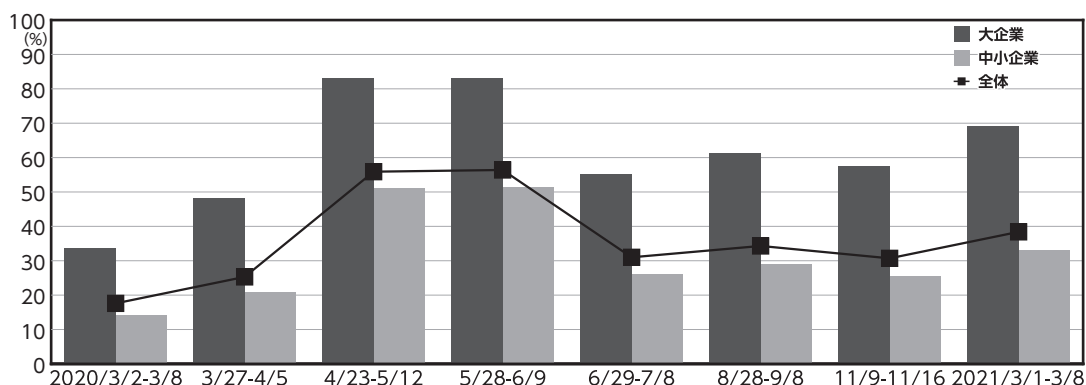


図1 企業のテレワーク実施率

出典 (東京商工リサーチ「新型コロナウイルスに関するアンケート」調査 (第2～6、8、10、14回) を基に総務省作成)

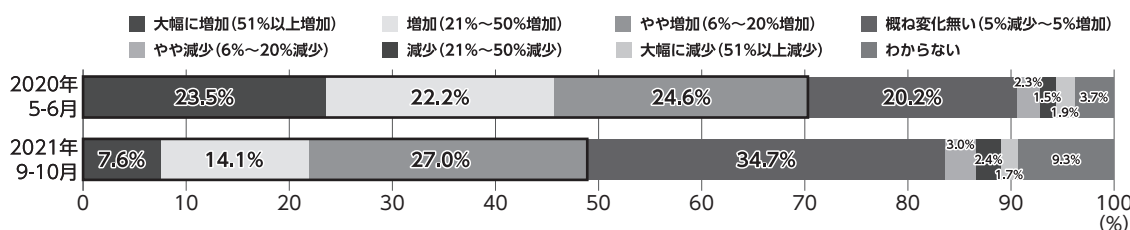


図2 家族と過ごす時間の変化【2019年12月(感染症拡大前)と比較】

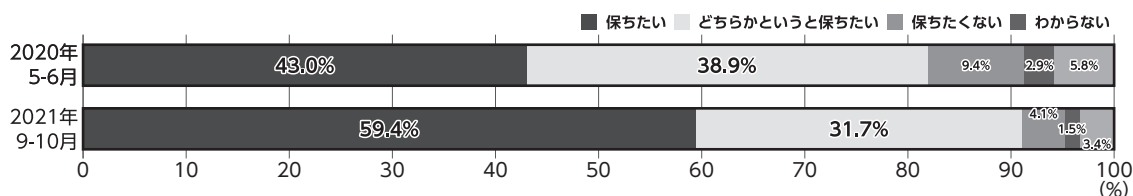


図3 現在の家族と過ごす時間を保ちたいと思うか(家族と過ごす時間が増加した人への質問)

が実施され、大企業では83.3%が、全体でも55.9%の民間企業が導入しており、緊急事態宣言解除後も全体で31.0%が継続して実施していたことが総務省より報告されている(図1)。同じように、大人だけでなく子供においても学校の休校措置がとられ、令和2年3月から実施された全国一斉臨時休校は3ヶ月にもわたり、その後も分散登校などが実施されていた。

このような中、人々の心情はどのように変化したのであろうか。多くの人々は感染の恐怖に怯えるなか健康への不安を抱え、自由に外出もできないことで極度のストレ

スにさらされた。しかし、そのような中でも好ましい変化が起きた部分もある。それは、家族と過ごす時間が増えたことだ。

内閣府が行った調査によると、最初の緊急事態宣言下では70.3%が家族と過ごす時間が増えたと回答しており、比較的感染状況が落ち着いていた令和3年9-10月時点においても48.9%が増えたと回答していた(図2)。さらに、家族と過ごす時間が増加したと答えた者に対して、現在の家族と過ごす時間を保ちたいと思うかと質問したところ、令和3年9-10月時点において91.1%が保ちたいと回答している(図3)。

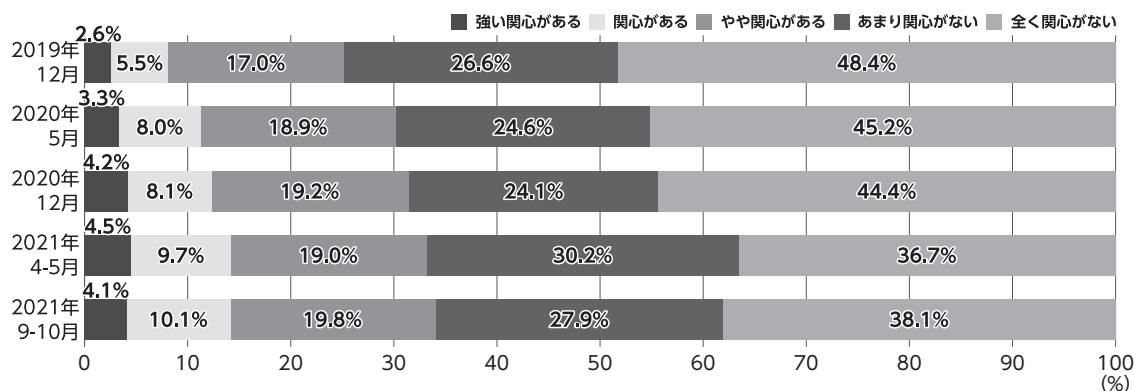


図4 地方移住への関心（東京圏在住者）

出典（内閣府 第4回新型コロナウイルス感染症の影響下における生活意識・行動の変化に関する調査、2021.11）

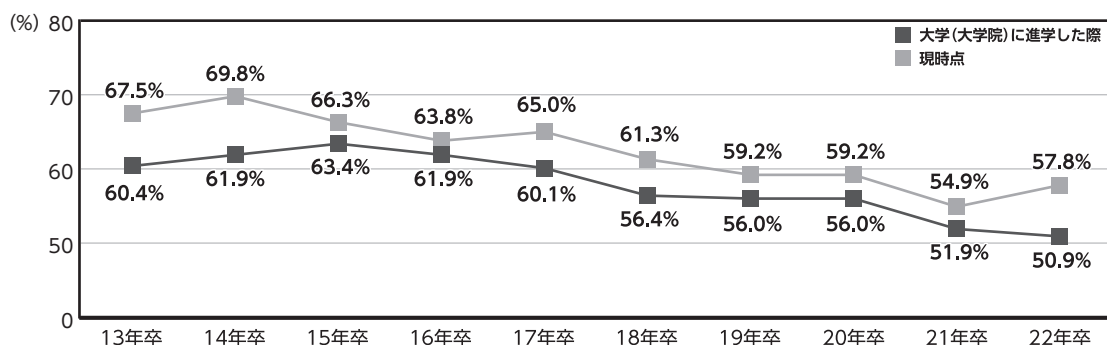


図5 地元（Uターン含む）就職の希望意向

出典（マイナビ 2022年卒 大学生Uターン・地元就職に関する調査）

また、人流抑制のために半強制的にテレワーク（在宅勤務）が推し進められたことや、情報通信技術（ICT）の活用が意識づけられたことで、地方移住へ関心がもたれたことにも注目したい。先述の調査によると、東京圏在住者において、地方移住へ関心がある者は令和2年12月時点において31.5%であり、その関心は日を追うごとに増加している（図4）。そして、学生の就労意識もコロナ禍によって変化をみせている。株式会社マイナビが令和4年3月卒業予定の全国の大学生、大学院生を対象とした調査では、地元就職を希望する学生の割合が57.8%と5年ぶりに増加に転じた（図5）。

社会変化が仏教界の追い風となるか

コロナ禍以前から、家庭内での仏事継承が問題となっていたことは周知のとおりである。仏事継承がなされないことは現代の働き方を反映しており、就労場所が都心に集中することにより転居と核家族化が進み、それが家庭内での仏事の分断を生んだひとつの要因となっている。この変化に対して、アフターコロナにおいては都心企業への在宅勤務や、地元企業への就労により、出生地にとどまり仏事継承が進む可能性もあるのかもしれない。

しかし、ただ社会の変化に期待を寄せているだけでよいのだろうか。

若い世代への働きかけがなぜ必要なのか

家庭内での仏事継承がなされないことを、社会や家庭内の問題と捉えていては問題の解決はなく、我々教師自身が若い世代へ働きかけをしていく必要があるだろう。現状のまま若い世代へのアプローチを怠れば、おのずと仏教への関心は薄れていく。NHK放送文化研究所による「宗教」をテーマとした2018年の報告では、2008年との調査結果との比較により、仏壇を拝む頻度は歳を重ねるごとに増加するのに対し、神仏を拝む頻度には世代効果があることが明らかとなった。つまり、2008年時点で神仏を拝む頻度が1日1回以上と答えた割合は、10

(%)	18～ 29歳	30～ 39歳	40～ 49歳	50～ 59歳	60～ 69歳	70歳 以上
2008年	4	9	16	25	33	44
2018年	2	4	9	12	26	31

図6 神仏を拝む頻度「1日1回以上」(年代別)

出典 (NHK 放送文化研究所 放送研究と調査、2019.4)

年後の調査において年齢を重ねても変化がみられなかった(図6)。この結果からわかることは、先祖供養を除いた神仏への関心は、単に年齢が上がっただけでは増加しないということであり、寿命の伸びつつある現代社会において、身内を送り出すようになる年齢には、既に仏教への関心が薄れている可能性すらある。

若い世代へのアプローチ

それでは、若い世代へはどのように働きかけていけばよいのだろうか。そのひとつの方法は社会貢献活動である。ここで、2021年に行われた全日本仏教会の仏教に関する実態把握調査結果を参照したい。寺院が社会貢献活動に取り組むことは、特に若い世代において評価されており、その中でも都会に居住し菩提寺をもつ20代・30代においては、持続可能な開発目標(SDGs)と寺院に親和性が高いと考える者の割合が顕著に高い(図7)。そして寺院で取り組むべきと考えられている社会貢献活動は、伝統文化・芸術の保存が最も高かった(P32図8)。

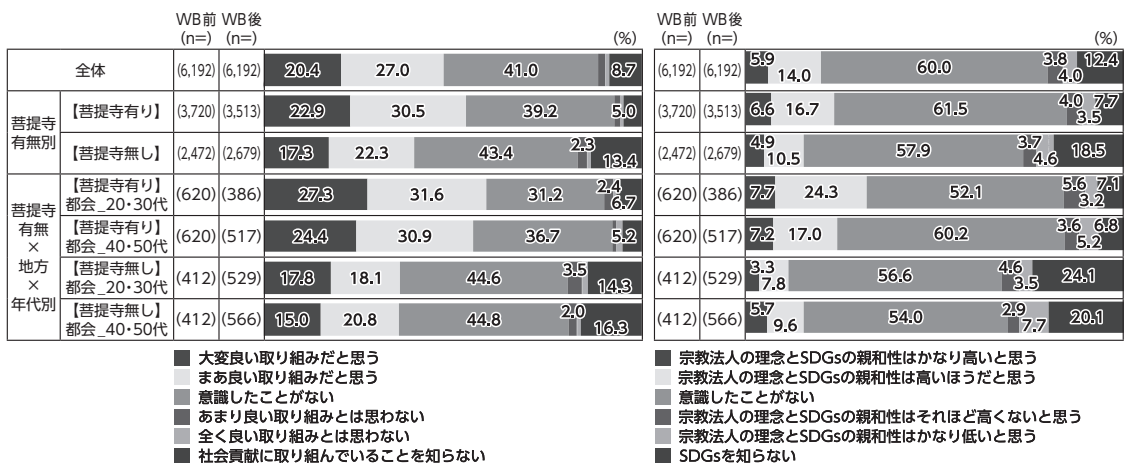


図7 お寺の取り組むべき社会貢献活動

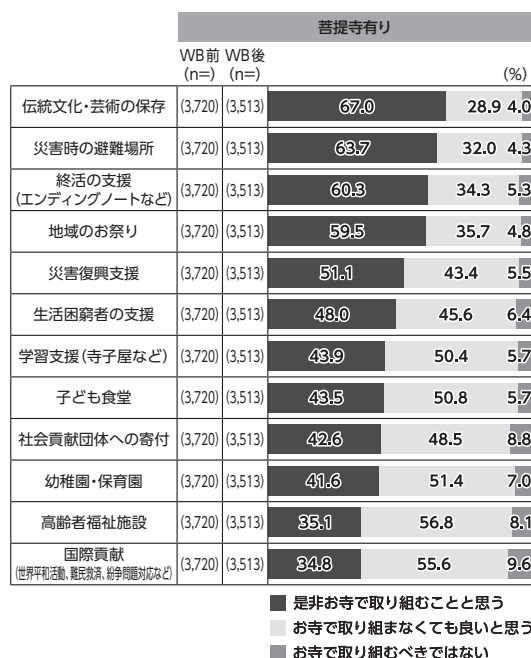


図8 お寺の取り組むべき社会貢献活動
出典(公益財団法人全日本仏教会 大和証券株式会社 共同調査
仏教に関する実態把握調査(2021年度) 報告書)

寺院が行え得る社会貢献活動は数多くあるが、本稿で取り上げる活動は、子供世代とその親世代の若い世代へと働きかけができる青少年教化である。

青少年教化の可能性

そもそも青少年教化には、宗教的な情操教育という観点だけではなく、社会貢献活動として期待される伝統の継承を子供たちに行う側面もあるだろう。そして、青少年教化の主たる対象である子供だけではなく、その親世代・祖父母世代に対する波及力をあわせ持った教化活動である。

以上を踏まえたうえで、世代を超えた青少年教化の事例として、興性寺(岩手教区寺籍31番)にて行われるランドセル祈禱会とその開催に至る背景を紹介し本稿を閉じたい。

ランドセル祈禱会

ランドセル祈禱会は護摩供を中心とした、小学校新入生を対象とする祈禱会である。祈禱会の詳細については中央布教師会にて既報のとおり(宗報令和3年12月号、第22回智山総合研修会代替分科会)であるが、子供だけではなく保護者も参列できる、参加型の法要である。取材に訪れたのは、新型コロナウイルスが全国的に広まる以前の令和2年3月であったため、現在の開催状況とは差異があることにご留意いただきたい。

ランドセル祈禱会を行う興性寺は岩手県奥州市に位置する。奥州市は人口約11万3千人と決して小さな市ではないが、人口減少は避けることはできず、興性寺最寄りの江刺商店街ではシャッターの閉まる店舗が多くあった。住職である司東和光師に話を伺うと、江刺地域では、児童数の減少により、12校の小学校が令和6年には5校に統合されるという。

そのような中でも興性寺では青少年教化に力を入れており、住職の司東和光師、そして副住職の司東隆光師の二代に亘って取り組みがなされている。この地域は曹洞宗の寺院が多く、また祈願を寺院とする風習があまりないという。そんな中、住職が晋山したときより春彼岸会を護摩法要とし、祈願をおこなってきた。それだけではなく、子供がお寺に集まるような取り組みをしており、近隣の保育園と連携し、運動会で披露した踊りを本堂裏手の観音堂前で奉納してもらうなど、幼少期からお寺に慣れ親しむ取り組みがなされている。住職が語るには、子供の頃の体験は貴重なもので、小さいうちから寺院に慣れ親しむことが重要だという。

一方、副住職は青少年教化をより広い

視野でも捉えている。当たり前ではあるが、子供はひとりでは寺院を訪れず、必ず親や保護者を伴う。大学進学の後、東京で会社勤めをしていた副住職は、10数年ぶりに自坊に戻ってきた際に、岩手を離れる前と寺院に来る者の顔ぶれがほとんど変わらないことに危機感を覚えたという。新しく寺院に関わる人が増えていないと感じ、なにかなければと考えた。副住職は専修学院生時代に携わった総本山智積院での護摩や、成田山新勝寺、川崎大師平間寺、高尾山薬王院にて参列した護摩に深い感動を受けていたという。この護摩での宗教的感動を地元岩手でも広めたいと考えたときに、思いついたのがランドセル祈祷であった。土地柄か、この地方の子供たちは七五三では神社に行くことが多く、寺院は滅罪としての役割がほとんどである。そこで、人生における節目に護摩を受けることを考え、ランドセル祈祷会を始めた。

このランドセル祈祷会は取材にうかがった令和2年時点で6回目を迎え、毎年5名から10名ほどの児童の参加がある。メディアにも積極的に周知を行い、当日は地元のテレビ局や新聞社が取材に来ていた。メディアに取り上げられることで反響もあり、檀家や地域の人々から、「このお寺は社会貢献活動への取り組みをしている」、と期待を込めた眼差しで見られるという。

実際にランドセル祈祷会へ参加した保護者に話を聞くと、護摩に参列したのも初めてだし、法事以外でお寺に足を運んだことはなかったという。副住職の目論見は果たされているようだ。背中よりも大きなランドセルを背負い境内を走り回る子供を、夫婦で見守る姿には、世代を超えた寺院との関わりの萌芽を思わせるものがあった。

※本稿で引用した図表の一部は、視認性の便宜をはかり、出典元の図表から強調箇所を抜粋して表示した。



左：司東和光師 右：司東隆光師



ランドセル祈祷会の様子

3 教化活動としての真福寺阿字観会の取り組みについて —これまでと、これから

智山教化センター 所員 倉松隆嗣

別院真福寺では、平成20年度より「真福寺阿字観会」を開催しています。

いまだ終束をみない新型コロナウイルス感染症の猛威によって、令和3年度における実施については規模を縮小し、現在は消毒や換気などの対策を施して午後3時から約1時間、最大12名（初心者2名含む）の参加者を募り実施しています。

「真福寺阿字観会」は、発足から10年を超える年月が経ちました。ここでは、当初掲げられていた主旨や目的は達成されているのか、阿字観会に対して参加者が求めているものとは何なのかなど、これまでの取り組みを振り返り、真福寺阿字観会を概観したいと思います。



令和3年度「真福寺阿字観会」の様子。ソーシャルディスタンスや参加人数の制限、消毒やマスク着用などの対策を施して開催しました。

教化活動として 「阿字観」の啓発に取り組む

本宗における教化活動としての阿字観への取り組みは、平成12年度に当時の教化目

標「生きる力—安らかなる心を求めて—」の具体的な教化活動のひとつとして取りあげられたところから始まっています。その間、「阿字観指導者養成講座」の開催、阿字観ご本尊の作成などにより、その推進を図ってきました。特に阿字観指導者養成講座では、全国の教師に向け、各ご自坊において仏さまと出会う教化活動である「阿字観会」を開催していただくことを念頭に、阿字観の伝授をはじめ、檀信徒に阿字観を指導するためのノウハウを学んでいただきました。当初この講座は総本山智積院と別院真福寺で、年2回開催していました。しかし、遠方の方の参加が叶わないとの理由から、年2回のうち1回はブロック単位での開催という形をとりました。そこで9年の歳月をかけて東北ブロックから近畿ブロックまでの7ブロックすべてのブロックで講座を開設し、多くの方にその実修と指導法を学んでいただきました。その人数は延べ500名を超えています。

真福寺阿字観会の開催

平成20年度には教化年次テーマ「仏さまと出会う」のもと、実際に体験することで自身に仏さまを感じ、出会うことができる瞑想である阿字観を、強調する教化活動として掲げ、さらなる推奨がなされました。そして智山教化センターでは、「別院真福寺において参詣者への阿字観の紹介と、自坊で檀信徒を対象とした阿字観会開催を検討する際のモデルケースとする」という目的で、真福寺阿字観会「いつもこころに満月

を「真福寺密教瞑想道場」を開催することとなりました。

これはまず平成20年4月、5月、6月の年3回、開催されました。午後2時より真福寺6階の広間を道場として定員は20名、モデルケースという目的のため、参加費は無料としました。参加者への開催の周知については、真福寺で行われている行事（現代教化フォーラム（現在の愛宕薬師フォーラム）、写経会、愛宕薬師ご縁日、やすらぎ寄席）参加者への印刷物配布と宗派ホームページへの案内の掲載を行いました。宗内教師に向けては宗報で案内をしました。

しんぶくじ あじかんえ
「真福寺阿字観会」開催！

平成20年4月、5月、6月の第4金曜日、東京愛宕の別院真福寺において、一般の方を対象とした阿字観道場を開設いたします。

来年度の教化年次テーマ「仏さまと出会う―阿字観・結縁灌頂―」では阿字観がとりあげられます。そこで、これを機に阿字観を教化活動として取り入れようと考えていらっしゃる方、またはすでに阿字観会を開催されている方も、阿字観会の一つのモデルケースとして一緒に体験されませんか？ もちろん、檀信徒の方に勤めていただいても結構です。

どうぞ真福寺阿字観会へおこし下さい。

「いつもこころに満月を 真福寺密教瞑想道場」

日 時： 4月25日（金）、5月23日（金）、6月27日（金）
それぞれ午後2時より

道 場： 別院真福寺 6階大広間（定刻前に直接6階にお越し下さい）

指 導： 智山教化センター長 渡邊照敬

定 員： 20名（※事前に智山教化センターまで参加申込をお願い致します）

参加費： 無料

平成20年3月号 宗報に掲載された阿字観会の開催案内



平成20年4月25日。初めて開催された「真福寺阿字観会」の様子

発展する真福寺阿字観会

平成20年度の開催によって、参加者には概ね好評をいただくことができましたので、定期的に開催するめども立ち、平成21年度からは、毎月1回開催（7月8月は未開催）されることとなり、会場は6階広間から2階の本堂に移りました。本堂に移ったことで、ご本尊さまに見守られている中で開催することができるようになりましたので、『智山勤行式』をお唱えし、ご本尊さまへのお勤めも行うようになりました。初心者には、開催30分前にお越しいただき、初心者向けのレクチャーも始まりました。その後も参加者は徐々に増え、平成28年には定員が30名に増員されました。

指導者についても、毎回同じ人が一人で行うのではなく、阿字観の伝授を受けた智山教化センター所員で指導を手分けして行うようになりました。皆それぞれの思いで行う法話も概ね好評を得ていました。

別院真福寺は、虎ノ門ヒルズの真横に建つという立地もあり、虎ノ門界限の仕事終わりのサラリーマンなどにも阿字観を修していただいたらよいのではないかという提案があり、平成27年度からは毎月第4火曜日、午後の部3時からと夜の部7時からの2回行うようになりました。瞑想の後に行う



平成24年6月28日。真福寺2階本堂で開催された「真福寺阿字観会」の様子



仏教伝道協会主催の仏教体験企画「体感する仏教」のチラシ
仏教伝道協会 HP より

僧侶を囲んでの茶話会が好評で、参加者からの熱心な質問や仏教に関する話に時を経つのも忘れて楽しく会話している姿も珍しくありませんでした。

このころの参加者アンケートを見ると、「智積院のホームページを見て参加した」と答える方が多く、夜の部では、やはり仕事帰りのサラリーマンの参加が目につきました。また、交通機関を使って遠方から参加する方も珍しくありません。年齢層は30代から60代が主で、心の安らぎを求めて参加される方が多いことも見て取れます。平成29年には真福寺阿字観会が婦人雑誌に「仏さまを感じる瞑想で疲れた心と体をリフレッシュ」というタイトルで取り上げられました。

このように、働き盛りの方を中心に、真福寺阿字観会は多くの人々にご参加をいただき、仏さまと出会う体験をとおして、生きる力を体得していただく機会をつくり出していきました。

その後、平成30年10月13日には、仏教伝道協会主催による「体感する仏教」が企画され、「港区・芝編」の瞑想・対話の道場のひとつとして、真福寺阿字観会を体験して

いただきました。

令和4年2月には、高知教区岩本寺住職より、智山教化センターの方々に、真福寺阿字観会と同様の指導を、別会場で実施していただきたいとの要請を受けて、渋谷区表参道にある店舗の一角で阿字観会を開催しました。これは、特に若い人が阿字観を実践し、心の安らぎを実感することで、若者のSNSなどの発信力を使って、その心地よい体験を拡散していただくことが目的です。

体験した若者の感想を聞くと、好意的なものが多く、心の安らぎを求めている若者が多いことに気づかされました。

このような形で、世間のニーズも感じながら、真福寺阿字観会は開催を続けてきました。



表参道での阿字観体験の会場。小さな会場で毎回数名の参加者ではありましたが、1日2回、3日間開催され、多くの若者が阿字観を体験しました。

智積院阿字観会

阿字観に対する認知の高まりを受けて、総本山智積院においても「檀信徒、一般参詣者に向けた教化活動の展開を図る」という目的のもと、平成27年度より阿字観会が開催されています。会場は金堂地下ホールで、毎月12日の10時30分と午後2時の2回実施しています。智積院阿字観会では智山講伝所阿闍梨並びに所員、阿字観を伝授された山内の課長が指導者となっており、総本山智積院の教化費により運営されています。智積院写経のつどいと同じ教化事業と

して開催していますので、参加費500円を徴収し、無料拝観券やペットボトル程度の飲物付きとなっています。こちらも参加者は毎回一日を通して20名ほどおり、現在も定期的に開催されています。



智積院阿字観会の様子。令和4年現在は、コロナ禍により開催が不定期となっていますが、心の安らぎを求めて実践される参詣者は少なくありません。

阿字観会開催の推進に向けて

このように、実際に体験する場として多くの参加者を受け入れ、心の安らぎやリフレッシュといった観点からの世間のニーズにも応えてきました。その経験を伝え、教育的な知識をさらに習得するために、阿字観会開催のノウハウを学んでいただく場として、智山伝法院の開設講座で「阿字観指導者を目指す人のための教理と実践（途中より阿字観会開設講座に名称変更）」を開設しました。これにより、阿字観会開設の知識や経験を積んでいただく機会を設け、また教化活動推進のために設けられている「教化活動開催サポート」によって、実際にご自坊で開催する阿字観会の開設までのお手伝いを行ってきました。

安らかなる心と阿字観会

今は、不安を抱える人が多い時代だといわれています。先般、愛宕薬師フォーラム

でご講演をいただいた、大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター客員研究員・大正大学非常勤講師、山竹伸二先生によると、宗教などによる伝統的価値観によりアイデンティティーが安定していた時代と違って、現在は価値観が多様化したことにより自由な分、アイデンティティーは不安定になっており、SNSなどによる「承認欲求」に見られるように、若い人を中心に心の不安定な人が増加しているそうです。

表参道での阿字観会を企画した方の話では、「不安を抱える若者は思いのほか多いと感じており、心の安らぎを得る瞑想などの体験を望む声は少なくありません」と、あえて若者の街で阿字観会を企画した意図を語っていらっしゃいました。今後も若者に向けた心の不安を和らげる企画を行っていく予定だそうです。

真福寺阿字観会の今後

このように、平成12年度から始まった阿字観の教化活動の推進は、平成20年度の真福寺阿字観会開催を経て、さまざまな発展と成果をあげてきました。総本山智積院においては、教化活動の一つとして完全に事業化されています。もちろん阿字観には、『一期大要秘密集』などの臨終行儀にみられる成仏の修法という前提はありますが、不安を抱える人が多いといわれている現代社会において、阿字観が果たせる役割も見逃すことはできないのではないかと思います。このように見てきても、真福寺阿字観会は、当初掲げていた“モデルケース”という役割は終えたといえるのではないのでしょうか。教化活動としての阿字観の可能性をさらに高めていくためにも、真福寺阿字観会の役割を根本的に見直す時期に来ているともいえそうです。

IV その他

1. 購入図書

【一般図書・雑誌・新聞】

書籍名	編集者名	発行所
位牌祭祀と祖先観	中込睦子	吉川弘文館
老いと死をめぐる現代の習俗: 棄老・ぽっくり信仰・お供え・墓参り	佐々木陽子	勁草書房
紙芝居「ブッダ〜お釈迦さまの一生」	公益財団法人 仏教伝道協会	公益財団法人 仏教伝道協会
ねえ、お坊さん教えてよ「どうしてお葬式をするの?」	浄土真宗本願寺派総合研究所 岡崎秀麿、富島信海	本願寺出版社
ねえ、お坊さん教えてよ「死んだらどうなるの?」	浄土真宗本願寺派総合研究所 岡崎秀麿、富島信海	本願寺出版社
「ひらく」第5号	佐伯啓思	エイアンドエフ

書名・誌名・紙名							
月刊住職	高野山時報	大法輪	中外日報	地域人	文化時報	仏教タイムス	六大新報

2. 宗贈図書・資料 宗内寺院・教会刊行物

【宗内寺院・教会定期刊行物】

刊行物	教区・寺籍	寄贈者名	刊行物	教区・寺籍	寄贈者名
岩槻大師	埼玉第4教区 寺籍1番	彌勒密寺	千の手	東海教区 寺籍35番	寂光院
岩手教区だより	岩手教区	岩手教区宗務所	高尾山報	東京多摩教区 寺籍1番	大本山 高尾山薬王院
お大師さまとともに	神奈川教区 寺籍1番	大本山 川崎大師平間寺	高幡不動尊	東京多摩教区 寺籍2番	別格本山 高幡山金剛寺
川崎大師だより	神奈川教区 寺籍1番	大本山 川崎大師平間寺	智光	下総印旛教区 寺籍1番	大本山 成田山新勝寺
桔梗通信	岩手教区 寺籍31	興性寺	成田山法光	京阪教区 寺籍39番	成田山大阪別院 明王院
くすのかおり	九州教区 寺籍21番	東漸寺	微咲	岩手教区布教師会	興性寺
虚空	東京東部教区 寺籍28番	東覺寺	宝蓮寺通信	栃木南部教区 寺籍26番	寶蓮寺

【宗内寺院・教会刊行物(含、宗内寺院関係寄贈分)】

刊行物	発行所	寄贈者名	刊行物	発行所	寄贈者名
奇才 小山榮雅 追悼	宝生院	小山龍雅	橋本大僧正を偲ぶ	大本山 成田山新勝寺	大本山 成田山新勝寺
紀要 5号、6号	川崎大師 教学研究所	川崎大師 教学研究所	風信雲書 わかりやすくQ&A - 仏事・信仰生活・教え - 第三集	珍珠山多聞寺 吉祥院	片野真省
興性寺案内リーフレット 第4版	岩手教区 興性寺	岩手教区 興性寺	普門山 蟹満寺誌	蟹満寺	蟹満寺
千手寺だより 光台 第1号～第16号	千手寺	倉島義彦	法燈	東覺寺	東覺寺
智泉	栃木智山 青年会	栃木智山 青年会	密蔵院便り 3号	密蔵院	密蔵院
成田山新勝寺 公式ガイドブック	時事通信 出版局	大本山成田山 新勝寺	理趣経ノート	株式会社 ノンブル	長澤弘隆
成田山文化財団年報 11号、12号	成田山 文化財団	成田山 文化財団	「理趣経法」ご真言ノート	株式会社 ノンブル	長澤弘隆

【他宗派定期刊行物】

刊行物	寄贈者名	刊行物	寄贈者名
あんじゃり	親鸞仏教センター	推進のしおり	妙心寺派教化センター
池上	池上本門寺	ちくまん	大本山大覚寺
おかげさま	妙心寺派教化センター	花園	妙心寺派教化センター
現代と親鸞	親鸞仏教センター	へんじょう	総本山善通寺
正法輪	妙心寺派教化センター	法華コモンズ通信	法華コモンズ仏教学林
親鸞仏教センター通信	親鸞仏教センター	令和3年辛丑歳三寶暦	総本山善通寺

【他宗派刊行物】

刊行物	発行所	寄贈者名
近現代『教行信証』研究 検証プロジェクト研究紀要 第3号	親鸞仏教センター	親鸞仏教センター
高野山大学密教文化研究所紀要 33号、34号	高野山大学 密教文化研究所	高野山大学 密教文化研究所
高野山大学密教文化研究所紀要 別冊 『咄字義』の研究	高野山大学 密教文化研究所	高野山大学 密教文化研究所
高野山大学密教文化研究所紀要 別冊 『声字実相義』の研究	高野山大学 密教文化研究所	高野山大学 密教文化研究所
高野山大学密教文化研究所紀要 別冊 『即身成仏義』の研究	高野山大学 密教文化研究所	高野山大学 密教文化研究所
浄土宗総合研究所年報 教化研究第32号	浄土宗総合研究所	浄土宗総合研究所
真言教学	真言教学研究所事務局	真言教学研究所事務局
仁和伝法所所報 第1号	総本山仁和寺 仁和伝法所	総本山仁和寺 仁和伝法所

【関係機関・団体定期刊行物】

刊行物	寄贈者名	刊行物	寄贈者名
アジア仏教文化研究センター ニューズレター	龍谷大学 アジア仏教文化研究センター	全仏	全日本仏教会
ICU宗教音楽センター会報	国際基督教大学 宗教音楽センター	ぴっぱら	全国青少年教化協議会
ケ・セラ・セラ	オトワレストラ	りす倶楽部	りす倶楽部事務局

【大学・関係機関・関係者】

刊行物	発行所	寄贈者名
新しい教養としてのポップカルチャー	日本実業出版社	内藤理恵子
いのちの選択に向きあうとき	浄土宗	浄土宗総合研究所
教化研究 31号	浄土宗総合研究所	浄土宗総合研究所
構築された仏教思想 覚鑊 内観の聖者・即身成仏の実現	佼成出版社	佼成出版社
國學院雑誌 第2号	國學院大學	國學院大學
死生学・応用倫理研究 25・26号	東京大学大学院 人文社会系研究科	死生学・応用倫理セン ター
宗教法制研究所紀要 第61号 法と宗教をめぐる現代的諸問題(十二) 第62号 法と宗教をめぐる現代的諸問題(十三)	愛知学院大学 宗教法制研究所	愛知学院大学 宗教法制研究所
住職不在寺院の現状と歴史 第42号抜刷 高野山真言宗の事例として	福井県立大学 経済経営研究	福井県立大学 池本裕行
浄土学 第58集 令和3年6月	浄土学研究会	浄土学研究会
情報環世界 身体とAIの間であそぶガイドブック	NTT出版	渡邊淳司
真言宗布教連盟五十年	真言宗各派総大本山会/ 真言宗布教連盟	真言宗各派総大本山会/ 真言宗布教連盟
善通寺勸学院叢書 第1巻 特集・霊場の未来 第2巻 特集・即身成仏	総本山善通寺	総本山善通寺
正しい答えのない世界を生きるための 「死」の文学入門	日本実業出版社	内藤理恵子
同宗連 118/119号	『同和問題』に取り組む 宗教教団連帯会議	『同和問題』に取り組む 宗教教団連帯会議
2019年度 研究報告書	龍谷大学 アジア仏教文化研究センター	龍谷大学 アジア仏教文化研究センター
ひとはなぜ「認められたい」のか 承認不安を生きる知恵に	筑摩書房	山竹伸二
表現する認知科学	新曜社	渡邊淳司
梵字集 朴筆書体による種子の世界	里文出版	小峰智行
見えないスポーツ図鑑	晶文社	渡邊淳司
六波羅蜜シリーズ 自戒-よりよく生きる-	公益財団法人 仏教伝道協会	公益財団法人 仏教伝道協会
わたしたちのウェルビーイングをつくりあうために その思想、実践、技術	ピー・エヌ・エヌ新社	渡邊淳司

(敬称略)

智山教化センターの役割と活動

智山教化センターは、真言宗智山派教化規程第二条「本宗の教化活動を効果あらしめるために、智山教化センターを設置する」の規定に基づき、真言宗智山派の教化を推進し、実動させるサポート機関です。

主な活動としては、

- ①教化推進施策として真言宗智山派が掲げる「教化目標（わたしたちの目標）」の策定。
- ②真言宗智山派で主催するさまざまな研修会の企画・立案と運営協力。また、教区で主催する「教区教化研究会」「檀信徒教化推進会議」などの開催協力。
- ③教師・寺庭婦人を対象とした教化情報誌の企画・編集。檀信徒に真言宗智山派の教えや「教化目標（わたしたちの目標）」などを知っていただくための教化誌の企画・編集。
- ④宗教文化全般、宗内寺院や他宗派の教化活動に関する情報収集や調査研究。
などを行っています。

智山教化センター構成員（令和2年4月～令和4年3月）

役職名	氏 名	就任年月日	所属寺院・団体
センター長	鈴木 芳 謙	R2.3.28	東京東部 香華院
	倉松 隆 嗣	H21.4.1	栃木南部 観照院
	上村 正 健	H27.4.1	埼玉第四 西光寺
	伊藤 尚 徳	H27.4.1	安房第一 極楽寺
非常勤所員	中嶋 亮 順	H29.4.1	埼玉第十二 正法寺中
	花木 義 賢	H29.4.1※1	東京北部 青蓮寺
	池田 裕 憲	H31.4.1	安房第二 圓光寺
	島 玄 隆	H29.6.1	東京多摩 金剛寺中
専門員	金剛 洋 輝	R2.4.1	埼玉第二 寶幢寺中
	高橋 一 晃	H31.4.1	埼玉第一 東養寺
	高岡 邦 祐	H29.4.1	埼玉第五 寶性院
	石川 照 貴	H31.4.1	埼玉第六 萬福寺
主 事	平川 真 海	R3.4.1	埼玉第八 観音寺中
	吉田 住 心	H24.9.1	埼玉第九 地藏院
	小杉 秀 文	H31.4.1	上総第四 勝覺寺
	佐藤 芳 典	H29.4.1※2	東京多摩 東福寺
主 事 補 記 屋 員	川又 俊 則	H31.4.1	鈴鹿大学
	萩原 輝 浩	H27.4.1	埼玉第七 大光院
	佐伯 隆 範	H27.4.1※3	神奈川 吉祥寺
	大槻 良 栄	H27.4.1	上総第三 金剛寺
主 事 補 記 屋 員	山口 あかり	H30.6.1	埼玉第六 總願寺中
	保田 研 心	R3.4.1	上総第四 蓮福寺中

※1 令和3年6月30日退任 ※2 令和3年3月31日退任 ※3 令和3年4月1日異動

年 報 第25号

（令和2・3年度合本号）

令和4年8月1日 発行

発行人 真言宗智山派宗務総長 芙蓉良英

編 集 智山教化センター

発行所 〒605-0951

京都市東山区東大路通り七条下ル東瓦町964

総本山智積院内 真言宗智山派宗務庁

電 話 075-541-5361(代表)

FAX 075-541-5364

印刷所 株式会社ディー・エイ・ティ・コーポレーション